

中・四国 アメリカ文学研究

Chu-Shikoku

Studies in American Literature

No. 50

June 2014

中・四国アメリカ文学会

The Chu-Shikoku American Literature Society

目 次

第42回大会シンポジウム報告

カウンターナラティブから読むアメリカ文学

- 城戸光世、辻 祥子、横田由理 1
Michael Gorman、松永京子

書評

福屋利信

- 『ロックンロールからロックへーその文化変容の軌跡』
..... 今石正人 21

日本ソロー学会編

- 『ソローとアメリカ精神ー米文学の源流を求めて』
..... 山下興作 24

入子文子 監修 谷口善郎、中村善雄 編

- 『水と光——アメリカ文学の原点を探る』
..... 上西哲雄 27

伊藤詔子監修、新田玲子編集

- 『カウンターナラティブから語るアメリカ文学』
..... 吉田美津 30

加藤幹郎監修、杉野健太郎編著

- 『交錯する映画 アニメ・映画・文学』
..... 山下興作 33

CONTENTS

Report of Symposium at the 42nd Conference

Reading American Literature through Counter-narrative

.....	KIDO Mitsuyo, TSUJI Shoko, YOKOTA Yuri	1
	Michael GORMAN, MATSUNAGA Kyoko	

Book Reviews

.....	IMAISHI Masato, UENISHI, Tetsuo	21
	YOSHIDA Mitsu, YAMASHITA Kosaku	

中・四国アメリカ文学会第42回大会シンポジウム

カウンターナラティブから読むアメリカ文学

まえがき

城戸光世

「ナラティブ」という語は古代サンスクリット語の "gna"、すなわち「知る」という意味の語幹にまでさかのぼり、それがラテン語の「知る」という意味の "gnarus" と「語る」という語 "narro" を通じて入ってきたという。そもそも人は、野家啓一氏の表現を借りるならば、「物語る動物」あるいは「物語る欲望に取り憑かれた存在」(13) である。だからこそナラティブは、民話や文学や映画などだけでなく、人々の日常生活の中にも常に見出される。人はナラティブを通してのみ、自身や他者の体験を、また周囲の環境や事物を、意味づけ、解釈し、そして理解しているのである。ナラティブそのものが、「人の精神の中心的機能あるいは例証 (*instance*) である」(13 強調原文) と述べたのはフレデリック・ジェイムソン (Frederic Jameson) であるが、ロラン・バルト (Roland Barthes) もまた、その有名な1966年のエッセイで、「ナラティブはどの時代にも、どの場所にも、どの社会にも存在する。それはまさに人類の歴史とともに始まる。ナラティブをもたない民族は、これまででもいなかったし、今もない。(中略) ナラティブは、国家を、歴史を、文化を超えて存在する。それは、人生そのもののように、ただそこにあるのだ」(109) と語る。

ナラティブ論のケンブリッジ版コンパニオンによれば、ここ二、三十年で、人文学だけでなく様々な学問領域でナラティブへの爆発的な関心が起こったという (4)。このような語る行為、あるいはナラティブへの昨今の学問的関心を反映した本シンポジウムの企画は、2012年に伊藤詔子氏の退職記念論集として刊行された『カウンターナラティブから語るアメリカ文学』に端を発する。同書「まえがき」のなかで伊藤詔子氏は、アメリカ文学には、テーマや作家や時代などと同様に目立つ枠組みとして、様々なナラティブが多彩に見いだされるとし、特に「旧世界的政治と文化と宗教の主要な潮流や趨勢に対する、生き生きとしたカウンターナラティブの多元文化的かつコスモポリタンの形成力」(3) にこそ、アメリカ文学の一番のおもしろさがあると述べる。また巽孝之・渡部桃子編『物語のゆらめき——アメリカン・ナラティブの意識史』でも、トマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) が独立宣言の草稿に自然に組み込んだ、植民地時代の無数のアメリカン・ナラティブが言及され、アメリカ国家の基本精神、その国家設立の理念を謳う文書そのものに、女性の道徳的な墮落を描く誘惑小説から、先住民に捉えられた白人の捕囚体験記や、改宗体験記、あるいは黒人たちの語る奴隷体験記まで、人種・性差・階級に関わる様々な物

語群が織り込まれていることが指摘されている(15)。植民地時代から現代にいたるまで、アメリカという国家の中から生まれてきた数々の文学作品を、現代の私たちが概観したときに見えてくるのは、このように多彩な物語群と、それと同じく無数に存在する抵抗の物語である。

今回のシンポジウムでは、この抵抗の語り、カウンターナラティブという視点から、四人のパネリストが、アメリカ文化の主流に抵抗する視点を秘めた作品を読み解く実践を行った。まず辻祥子氏が、19世紀アメリカ文学を代表して、元軍艦乗組員であったハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の長編『白いジャケット』(*White-Jacket, or The World in a Man-of-War*)を取り上げ、この作品では、水夫が奴隷に喩えられ、水夫物語が奴隷体験記と同種のカウンターナラティブとして提示される一方で、この二つの抵抗の物語がいかに隔たったものであるかということも作家は暗示しているのだと論じた。

次に横田由理氏が、先住民作家ルイーザ・アードリック(Louise Erdrich)の「ノース・ダコタ四部作」を取り上げ、そのカウンターナラティブを検討し、アードリックの作品は、口承伝統という先住民の語りの様式を継承しつつも、伝統的な神話物語の再生や儀式的な語りとは異なるゴシップ的な共同体的な語りを特徴とし、同じ出来事が異なった視点から語られることで重層的な物語となっていることを指摘した。また作品や人物に対する読者の既存の知識や固定された意味を転覆し、脱植民地主義的な視点をも導入するアードリックの新しい作品群が、自らを変革しながら部族伝統の核を保持して生き残ってきたチパワのしなやかな生き方と重なっていることも明らかにした。

一方マイケル・ゴーマン氏は、日系作家ジュリー・オーツカ(Julie Otsuka)の強制収容所体験を描いた2002年の作品『天皇が神だったころ』(*When the Emperor Was Divine*)を取り上げ、言葉にできない喪失やトラウマ的な過去の出来事が描かれた彼女のこの作品が、第二次大戦を舞台とした単なる歴史小説ではなく、現在のアメリカ合衆国政府のマイノリティに対する市民権侵害への批判の語りとしても読めることを示した。

最後に松永京子氏は、原子を隔離・分離し、機械のように制御しようとする<直線的>で<破壊的>な現代科学のナラティブを批判し、原子の本来の姿を尊重する<育成的>で<詩的>な新しい原子のナラティブを提案する詩人として、チェロキー族の血を引く詩人マリルー・アウィアクタ(Marilou Awiakta)を紹介し、彼女が現代科学のナラティブの再考を促す機会を読者に与えてくれているのだと論じた。これらパネリストたちが紹介するカウンターナラティブはほんの一例に過ぎないが、このシンポジウムを通して、アメリカ文学における多彩なナラティブの研究にまた一つ違った視座を提供できたのではないかと考える。

引用文献

- Herman, David, ed. *The Cambridge Companion to Narrative*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. Print.
- Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Ithaca: Cornell UP, 1981. Print.
- Barthes, Roland. "Introduction to the Structural Analysis of Narratives." In *The*

カウンターナラティブから読むアメリカ文学

Narrative Reader. Ed. Martin McQuillan, NY: Routledge, 2000:109-114. Print.

伊藤詔子監修・新田玲子編集『カウンターナラティブから語るアメリカ文学』音羽書房鶴見書店、2012年。

巽孝之・渡部桃子編著『物語のゆらめき—アメリカン・ナラティブの意識史』南雲堂、1998年。

野家啓一『物語の哲学』岩波書店、2005年。

水夫と奴隷の物語： 『白いジャケット』に見られるカウンターナラティブの限界

辻 祥 子

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の5作目の長編小説『白いジャケット——軍艦の世界』 (*White-Jacket, or The World in a Man-of-War*) には、アメリカ海軍の厳しい軍紀のもと、平水夫が上官から人権を奪われ管理される実態が、当の平水夫であるホワイト・ジャケット (White-Jacket) の目を通して語られている。当時水夫の自伝や回想録は一般に出回り、水夫物語 (sailors narrative) として一つのジャンルを形成していた。『白いジャケット』はこれを基にしたフィクションといえる。水夫物語にかんしては、マイラ・C・グレン (Myra C. Glenn) が著書『ジャック・タールの物語』 (Jack Tar's Story) の中で詳しく紹介している。19世紀前半、北米大陸では合衆国が「民主主義国家」としての領土の拡張を進める中、水夫物語は船内の反民主主義的実態を暴露していくのである。

そこでとくに注目すべきは、『白いジャケット』が、水夫の些細な失態に対して頻繁に行われていた鞭打ち刑の問題を取り上げ、鞭打たれる水夫の姿を奴隷に喩えて、その理不尽な実態を糾弾していることである。サムエル・オッター (Samuel Otter) によると、この時代、水夫に限らず労働者や女性など社会的弱者を救済しようとする社会改革運動がおこり、彼らの境遇の悲惨さを世に訴えるために、奴隷の比喩は頻繁に使われた (Otter, "Jumping" 50-51)。また奴隷自身が、プランテーションから逃亡し自由を手にしたあと、奴隷制度の非人間性について語りはじめ、奴隷体験記 (slave narrative) というジャンルを作っていく。その意味で、水夫物語も、奴隷物語も、民主主義を標榜する国家ナラティブの矛盾を突くカウンターナラティブの役割を果たしているといえる。

しかし、よく読むと一見弱者の代表のように見える語り手ホワイト・ジャケットが、水夫と奴隷、とくに白人水夫と奴隷の間に線引きをし、両者を同等には扱うことを避けている。それどころか、黒人や混血の水夫仲間に対してある種の優越感を持っていることを告白している。オッターの指摘どおり、語り手の白いジャケットは、奴隷の黒い皮膚と同じように、それを身にまとっているがゆえに差別の対象となるわけだが、結局彼は、最後はいとも簡単にするとそこから逃れている。すなわち『白いジャケット』は、オッターの仮説のように、奴隷物語と横並びに扱うことはできない。この作品は白人水夫と黒人奴隷が、社会の弱者どうし、連帯意識を持つことの難しさを暗示しているのである。本発表では、『白いジャケット』をアメリカの社会体制への批判を盛り込んだカウンターナラティブとしてみたときの可能性と限界を、当時の水夫物語や奴隷物語を参考にしながら探った。

水夫が奴隷に喩えられるというのは当時の水夫物語によくあることで、冒頭で紹介したグレンの批評によると、リチャード・ヘンリー・デナ (Richard Henry Dana)、ジョン・ロス・ブラウン (John Ross Browne)、そしてベン・エズラ・スタイルズ・イーライ (Ben-Ezra Stiles

Ely) といった水夫の手記にもみられる (Glenn 122-24)。そこで『白いジャケット』において、軍紀に違反した水夫が鞭打ちの刑に処せられる場面に注目すると、「ここにあるのは、人間が奴隷さながらに裸にされ、犬よりもむごたらしい鞭を加えられる姿だ」(138) (下線筆者) といった怒りに満ちた訴えがなされている。また、当時処刑への立ち会いは乗組員全員に義務付けられていた (135)。水夫たちは奴隷と同じように、自分の刑が仲間を目撃されるという屈辱感を味わい、また仲間の処刑を目撃するという苦痛を受けたのであった。

さらにホワイト・ジャケットは、水夫に対する鞭打ち刑が、奴隷にたいするものよりもひどいことを指摘している。「アメリカ軍艦上では、500人の奴隷がいる農園で10年間に行われた鞭刑よりも多くが目撃された」という。また、アメリカ軍艦の士官は暴君で、彼らに比べたらバージニアの農園主のほうがましであるし、「指揮ぶりもずっとおだやかで紳士的である」(141) とまで言っている。

しかしながら一方で『白いジャケット』において、水夫——とくに白人水夫——と黒人奴隷が決定的に違う点が示されていることにも注目したい。さきほど、「奴隷のように裸にされ」鞭打たれるという表現に注目したが、「被告にシャツを着せてやったらそれでおしまいだ」(139) ともいわれている。すなわち、鞭打たれて奴隷のようになるのは一時的であり、逆にシャツを身に着けると、彼らは奴隷でなくなるのである。実際、白人水夫の鞭打ち場面に注目すると、このシャツを着る行為が何度も強調されている。

まず砲口甲板で喧嘩をした罪で捕えられた4人の水夫の処遇を見たい。艦長は操舵係に彼らの「着衣を剥げ！」と命令する。そこで「操舵係は被告に手を貸し、ジャケットとシャツを脱がしてやっていた。これがすむと、シャツはだらりと皆の肩に掛けられていた」という。さらに「艦長からまた合図があり、操舵係が数人歩み出で、被告のシャツを払いのけた」(136-37)。それから一人ずつ刑をうける様子がそれぞれ描かれているが、最後の男の鞭打ちが終わったとき、彼は「泣いて仲間のところに行くと、血走った目をしてシャツを着た」という。このシャツを着るという行為は彼だけでなく、4人の刑すべてが終わったことを表す象徴的な儀式であるといえる。その直後『解散のパイプを吹け！』と艦長が叫び、乗り組みはゆっくりと退散(138)するのである。

もう一つの例は、重罪の水夫に適用されるという「まわし刑」という刑罰である。罪人が複数の船をたらいまわしにされて刑を受けることからその名がついた。彼のシャツは血に染まって (bloody) いる。なぜなら、刑が済むごとにシャツが投げ与えられ、水夫がそれを着るからである。シャツは汚れるが、水夫がその都度奴隷の状態から解放されるため、それは必要不可欠の行為であり、ある種の儀式であるといえる。(371)

また、水夫たちの意識も一時的に奴隷の状態に貶められるだけで、まもなくもとに戻る。ウーシャントという老人が鞭打たれた直後の場面に注目してみる。兵曹長がシャツをもって歩み寄ると、老人はそれを「バラモンのような威厳のある態度で」(366)、いったん払いのけ、自分の服は自分で着ると言う。彼なりに自尊心を取り戻そうとしているのがわかる。

鞭打ちの場面は、実際の水夫による手記にも描かれる。たとえば、先述のデイナの手記では、鞭打ちを終えた水夫が、傷口が腫れているので香油を塗らせてくれと頼み、それを聞いた船長は「だめだ」と退けながら、それでも「奴にシャツを着させろ、それが一番の薬だ」という (Dana

79)。しかしながら『白いジャケット』のように、シャツの脱ぎ着が何度も繰り返されることはない。やはりメルヴィルは意図的にこの場面を強調しているのではないか。

ここで、「五月祭」という名の黒人、「薔薇水」という名の混血人が鞭打ちの刑を受けるときだけ、最後にシャツを着る場面が描かれていないことに注意したい。一方、これまで紹介した鞭打ちを受ける水夫たちは、「ポルトガル水夫」のアントン、鞭を打たれるたびに「紫色の横縞」ができていくジョン、「白い背中」が見えるピーター、「茶色に日焼けした頬」など、明らかに白人である。このことから判断して、メルヴィルは、鞭打ちのあととシャツを着る水夫を描くとき、あくまで白人水夫を念頭においていることがわかる。

ここで、1849年から1866年までに出版された奴隷体験記を10編集めて収録した『奴隷に生まれて』(*I Was Born a Slave*) 第2巻を参照してみると、奴隷はつねに裸の状態でも鞭をふるわれ続ける身であることがわかる。たとえば、ヘンリー・ビブ(Henry Bibb)は次のように言う。「そのときだった。私は常に賃金もなく、自分の裸を覆うに十分な服もなく、鞭のもとで働かされるみじめな奴隷であるとわかり始めたのは…」(14)。また鞭打ち刑の様子は随所に語られるが、衣服がはかれる場面から始まっている場合、最後に衣服を着る行為まで描かれることは皆無である。それどころか、患部には塩水がかけられ、奴隷の苦痛をさらに強める仕打ちが描かれている。逃亡未遂の罪人の場合は、塩水のあと、ベルつきの首輪までかけられる。これは水夫の状況よりはるかに苛酷である。(Taylor 59, 62, 277)

再び『白いジャケット』に戻って、語り手ホワイト・ジャケットの人種観に注目する。彼は混血の水夫仲間の鞭打ち刑を見て同情しつつ、「ああよかった。おれは白人だ」といってうっかり白人としての優越感を露呈しそうになる。そこで彼は急いで付け加える。「だが白人だって鞭をくらののを、ぼくは見てきたのだ。白人、黒人問わず、僕ら朋輩みんながその可能性にさらされているのだ」。ところが、その直後、やはり、自分の人種差別的な意識を次のように白状してしまう。「そうは思うものの、どういふわけか、僕らの内なるところにはなにものかがあって、自分を自分で欺罔にかけ、僕らよりも地位は低いと想像している人間がいるなら、彼らに対する架空の優越感情を覚える機会を逃そうとはしないだろう」(277)。語り手ホワイト・ジャケットは、自分と黒人の間に線を引いて、彼らより上位に立とうとしている。

白人特有の優越感自体は、実際の水夫物語の多くで認められる。グレンの批評によると、語り部の水夫は、本来黒人奴隷に適應される鞭打ちを、白人男性が受けるのはおかしいということを繰り返して非難するのである(Glenn 126-128)。この場合、軍艦の中の階級差別に対する抗議の声の根底には、白人の自分たちは黒人とは違うのだという人種差別の意識が横たわっていると見える。先に引用したホワイト・ジャケットの告白も、水夫のこうした心理を前提になされていると考えられる。

さらに、『白いジャケット』では鞭から受けるインパクトについても、主人公の語り手と黒人奴隷の違いを際立たせている。たしかに同時代の水夫物語には、鞭打ち刑は、白人水夫の人間性や男らしさを剥ぎ取り、あとで肉体的な傷が癒えたとしても心の傷は残ると主張されている(Glenn 128)。しかし語り手ホワイト・ジャケットはここでも、白人水夫を黒人奴隷の境遇から引き離す証言をしているのだ。彼自身が鞭の刑にかけられるかもしれないという場面で彼は次のように言う。「僕の人間性は僕の中に底なしの深淵のようにあるのが感じられたし、クラレット

艦長のどんな言葉、どんな打撃、どんな鞭もこの自分の人間性をそこまで深く切りつけてくるとは思えなかったのだ。」(280)このように語り手は、一方で船乗りに対する鞭打ち刑を奴隷に対するそれを引き合いに出して糾弾しながら、もう一方で、人間性を奪われた奴隷とは違う次元に自分を置こうとしている。

最後に考えたいのが、語り手の着ている白いジャケットと黒人の黒い皮膚との比較である。オッターは、白いジャケットが彼の身を守るどころか、紺のジャケットを着た仲間たちの中で目立ってしまい、虐待の対象になったり、行動の自由を奪ったり、危険な目にさえあわせたりすることから、黒人の皮膚との類似を指摘している (Otter "Race" 14-15)。ちょうど、黒人が、その黒い肌のために虐待されたり拘束されたりすることの隠喩ともとれる。しかしながら語り手は、白いジャケットを着たまま海に放り出されたあと、それを切り裂いて自由になるのである (394)。彼はこの行為によって、水夫ではない、新しいアイデンティティを手に入れる。ここに、黒人の皮膚との決定的な違いが暗示されている。

以上みてきたように、『白いジャケット』は、ある意味、奴隷物語と共通点を持つ水夫物語の一つとみなすことができ、オッターなどはそのように読んでいるが、刑罰の場面、語り手の意識、語り手の状況を奴隷のそれと比べていくと、かなり隔たりのあるものであることがわかる。つまり、白人の社会的弱者が黒人によせる共感には限界があったと考えられる。水夫物語と奴隷物語、二つのカウンターナラティブには埋めようのない乖離がある。メルヴィルは、この作品でその限界を随所で暗示しているのではないか。

引用文献

- Dana, Richard Henry. *Two Years Before the Mast: A Personal Narrative of Life at Sea*. 1840. Print.
- Glenn, Myra C. *Jack Tar's Story: the Autobiographies and Memoirs of Sailors in Antebellum America*. New York: Cambridge UP, 2010. Print.
- Huntress, Keith. "'Guinea' of White-Jacket and Chief Justice Shaw," *American Literature*. 43.4 (1972): 639-41. Print.
- Melville, Herman. *White Jacket: or, the World in a Man-of-War*. Chicago: Northwestern UP and the Newberry Library, 1970. Print.
- . *Pierre or Ambiguity*. Chicago: Northwestern UP and the Newberry Library, 1970.
- Otter, Samuel. "Jumping out of One's Skin in White-Jacket," *Melville's Anatomies*. California: U of California Press, 1999. 50-100. Print.
- "Race' in Typee and White-Jacket," *The Cambridge Companion to Herman Melville*. Ed. Robert S. Levine and Andrew Delbanco. Cambridge: Cambridge UP, 1998. 12-36. Print.
- Taylor, Yuval, ed. *I Was Born a Slave: An Anthology of Classic Slave Narratives*. Vol.2. Chicago: Lawrence Hill Books. 1999. Print.

土地と共同体の記憶と語り ——ルイーズ・アードリックのノース・ダコタ作品群

横 田 由 理

I チパワの歴史とタートル・マウンテン保留地——移動と混血のダイナミズムと土地篡奪

アメリカの先住民は約2万年前アジア大陸からベーリング海峡を通過して南北アメリカ大陸へ移動を続け、その後も各地で移住を繰り返し、先住民全体が長期にわたる移動の歴史を生きてきた。アードリック (Louise Erdrich) の所属するタートル・マウンテン部族は、13世紀頃五大湖周辺に移住し西に移動しつつ分裂を繰り返したチパワの一部族で、フランス人の毛皮業者などと混血して文化的にも宗教的にも重要な影響を受けた。(アードリックの作品群の中ではラマルティン (Lamartine)、ピュヤット (Puyat) などの苗字にその痕跡が伺える。) 1820年頃北東ダコタ地域へと移動するが、1863年タートル・マウンテン部族と合衆国との最初の条約によってレッド・リバー・バレーが割譲され、さらに1882年の連邦政府によるタートル・マウンテン保留地への囲い込み、1887年のドーズ法 (一般土地割譲法) により、肥沃な農地は白人の手に渡り部族は分散していく。

アードリックはこのドーズ法について『ラヴ・メディスン』 (*Love Medicine*) の中で、リップシャ (Lipsha) が "the land my great-grandparents were allotted when the government decided to turn Indians into farmers" (11-12) と合衆国の同化政策を指摘し、アルバタイン (Albertine) が "The policy of allotment was a joke. As I was driving toward the land, looking around, I saw as usual how much of the reservation was sold to whites and lost forever" (12) と述べるように、ドーズ法がもたらした先住民の土地喪失という悲劇を現代の若者の目を通して描いている。『リトルノーホースにおける奇跡の最後の報告』 (*The Last Report on the Miracles at Little No Horse*) では尼僧のヒルダガード (Hildegarde) の声を通して、"They'll lose all, of course, being unused to the owning of the land. Incredibly, it makes no sense to them. They avow, in their own particular way, that the earth is only on loan." (72) と先住民と植民地主義者との土地観の相違を明らかにし、先住民が迎えることになる宿命を示唆する。先住民にとってホームであり神聖なものであった土地を商品化し不動産という資産に変えることが同化政策の要であった。1892年のマッカンバー合意書では約1000万エイカールのタートル・マウンテン部族の土地が合衆国政府に買収され、現在はタートル・マウンテン保留地を中心にノース・ダコタ州と隣接する二つの州に部族の所有地が分散している。

II 「ノース・ダコタ・サーガ」について——アードリックの語りの技法

アードリックの語りの手法は、ママデイ (N. Scott Momaday) やシルコウ (Leslie Marmon Silko) など現代先住民作家の作品の多くと同様、口承伝統という先住民の語りの様式を継承するものの、伝統的な神話物語の再生や儀式的な語りではなく、ゴシップ的な共同体の語りを特徴とする。批評家のアダムスン (Joni Adamson) は「公式的風景 (official landscape)」の独白的で権威的な声、合衆国政府やカソリック教会の声に対するものとして、不可視の「大衆の風景 (vernacular landscape)」の多数の声、権威的でない共同体の声を位置づけている (103)。正史を語る権威的な声に対するこのマイノリティ文学に共通する「声なきものの声」は、例えば、トニ・モリソンの『ジャズ』(Jazz) における同様のゴシップ的な共同体の語りにも通底する。作品群の最初の作品である『ラヴ・メディソン』では特定の語り手はなく、登場人物が個人的、家族的、共同体的な歴史の主体として自らの視点で自らの言葉で語っていき、ポリフォニックな語りの集積がコラージュ的に共同体の物語を形成していく。個人の物語はより大きな部族的コンテキストの中で理解可能になり、また、様々な視点から語られる同じ出来事の繰り返しという一連の語りが重層的な物語を形成し、共同体の多様な側面を照射していく。外部世界があまり介入しない共同体中心の物語でもあり、それにより共同体構成員相互の関係が生き生きと描かれ、ステレオタイプのインディアン像とは異なる先住民の実像を異なる世界観と共に描くことで、マスターナラティブの転覆が図られている。この第一作目の語りの技法が後続の作品群に継承されると同時に、それぞれの物語の読みは後続する関連する物語によって改変されつつ「一つの長編の物語 (Saga)」となっていく。

口承伝統を継承した語りの技法としては、『トラックス』(Tracks) のナナプッシュ (Nanapush) による祖父母から孫たちへの語りの伝統の継承、『ラヴ・メディソン』のジューン (June) のホームカミングで始まり象徴的な帰郷で終わる「円環の構造」、神話的過去の強力な精霊的存在として、メディソン・ウーマンの存在であり人間を超越した存在であるフルール (Fleur) やフルールの所有する土地に隣接する湖に住むと言われる精霊 (マニート) で「湖の主」のミシュベッシュ (Misshepeshu) が登場することなどが挙げられ、チパワの世界観と共に口承の伝統文化が作品群を色濃く彩っている。

チパワ伝統社会では共同体的アイデンティティの根幹となる部族社会の氏族制度が社会的にも部族共同体を支えているが、アードリックの作品群に描かれるのはマルチエスニックな共同体で、人種的文化的多様性を特徴とする。第2作目の『ビート・クイーン』(The Beet Queen) では主要舞台が保留地近隣の町に移り、ドイツ系移民に焦点が移される。また、ジャック (Jack) やドット (Dot) のように先住民の血筋を否定し白人世界への同化を志向するものの姿も描かれるなど、人種という境界を脱構築した語りが試みられている。『リトルノーホースにおける奇跡の最後の報告』の第2章の中の「ナナボゾが狼を改宗させる」という話では宗教的な混血性を描きながら、カソリックの儀式や慣行を先住民の伝統と信仰で複雑化させることで文学的な脱植民地化が図られる。ヨーロッパの小説技法と深層レベルでのチパワの概念的枠組みの融合したこの作品群を、デニス (Helen May Dennis) は "mixed-blood narratives"、"mixed Gestalten narrations" と呼んでいる (176)。歴史的事実という西欧的な概念に対峙する先住民的な歴史観

や相互転覆的な両者の真実の概念化を指摘し、この作品群の「相互関連的な焦点化 (mutually referential focalization)」という技法は、保留地の複雑さのみでなくそれを記述するための物語学的コード、正史的なコードの複雑さについても読者に知らせていると述べている (同)。このように、チパワの移動と混血の歴史は、文化的なハイブリディティと共に語りの様式をも特徴づけるものとなっている。

Ⅲ 語りのダイナミズム——語りの権威、真実の脱構築・反植民地主義的語り・サバイバル

口承の物語は語る度に微妙な差異が生じ、一つの物語に様々なバージョンが存在するが、それが同じ物語として認識される。改変可能な流動性を持ち、しかも核の部分は保持される。文字となったテキストが固定され権威をもったものとなり、別バージョンは違うものとして認識されるのと異なるナラティヴの認識がここにある。口承のナラティヴを継承するノース・ダコタ作品群も時空間を超越して流動的に改変され、新しい情報が開示されていく。

『リトルノーホースにおける奇跡の最後の報告』では、第1作目の『ラヴ・メディソン』から登場し、『トラックス』ではこの保留地に新しく赴任してきた若き神父として "one day the new priest, just a boy really, opened our door." (6) と紹介されたデミアン神父が実は女性であったことが初めて明らかとなる。また、作者の出自に照らしてタートル・マウンテン保留地をモデルにしていると目されていた作品群の中心的地帯である保留地も、初めてその名称が「リトルノーホース」であることが判明し、また、一つの実際の場所に特定できない地理的なあいまいさを示している (Beidler & Barton 9-16)。『リトルノーホースにおける奇跡の最後の報告』と題されたこの作品も「最後の報告」とはならない可能性もあり、語りは常に改変され多様化し続けていく。バフチンによって提唱された事実の不確実性をアードリックのノース・ダコタ作品群は先住民の世界観に基づく全く別の角度から照射する。固定された意味という考えの転覆、出来事の限定的な報告の転覆という視点から見ると、あらゆる前提的な言及の枠組みを疑問視させるアードリックの作品は、読者の知的、心理的、感情的な空間を反植民地主義的な動きへと誘導することも可能にさせるとレインウォーター (Catherine Rainwater) は指摘する (157)。『トラックス』の中で、部族の長老ナナプッシュはチパワの民は "a tribe of file cabinets and triplicates, a tribe of single-space documents, directives, policy." (12) になり下がったと憂うが、自分たちは 'A tribe of pressed trees' (同) でもあるという言葉をつけ加える。'pressed trees' とは木からとられたパルプからできた「紙」のことで、ナナプッシュに象徴される伝統文化の力が伐採という近代化による木々の消滅とともに弱まるとしても、チパワの人々は失った土地の木々から作られた紙を政治的手段として利用することも可能となる。'A tribe of pressed trees' の一員であるアードリックの作品群も、単に過去の記録を書き換えるだけでなく、反植民地主義的な物語を書きこむことによって、深いレベルでの意識の再構築を読者に促し、読者を「現実の社会的記号的な改変の担い手」(Rainwater 151) にすることで社会変革へとつないでいけるのである。

一つ留意しておきたいのは木から紙を作るという近代テクノロジーが否定されてはいないとい

う点である。多くの先住民作家は先住民社会への近代化の侵入を自然の崩壊と先住民共同体の弱体化として作品化してきたが、アードリックは先住民の伝統文化と近代的なテクノロジーの二項対立を否定し、チパワ文化固有の柔軟性と適応性と融合のダイナミズムで両者を受け入れ、『ビンゴ・パレス』(*The Bingo Palace*) という作品名に象徴されるように、近代化や近代テクノロジーをサバイバルのための変革の力として描いている。

リブシャが "But us Indians, we're so used to inner plot twists that we just laugh." (*The Bingo Palace* 17) と連邦政府のペテンや偽りの言葉に騙され続けてきた歴史を示唆するように、作品群に描かれるユーモアのほとんどすべては政治的であり、「沈鬱な表情の寡黙なインディアン」という押しつけられたイメージ、ステレオタイプのインディアン像を転覆させ、ユーモアをサバイバルの手段にすることで、白人社会の「消えゆくインディアン」という神話にも対抗している。

IV まとめ——チパワの抵抗と変革とサバイバルの歴史、そして未来

合衆国による侵略の歴史の中で、チパワの人々は自らを変革しつつ部族伝統の核の部分を持続し生き残りを図ってきた。次の作者の言葉がそれを如実に物語っている。「膨大な喪失に照らして現代の生き残った者たちの物語を語らなくてはならない。大災害の結果残された文化の核を守り讃えながら。そこにはいつも土地が残っている」("Where I Ought to Be" 48)。

チパワの故郷、五大湖周辺には現在もなお氷河期の記憶をとどめる無数の湖が点在する。この水にあふれた大地の特性を映し出して、ノース・ダコタ作品群は川、湖、洪水、雪といった「水」の繰り返されるイメージによって結びつけられている。水の持つ流動性と可変性が、作品世界に描かれたチパワ先住民社会を中心とする人々の共同体の在り方を象徴し、未来に向けた先住民社会の方向性を提示している。形態を変化させながらも存続し続け、決して消滅することのない水、生命の源である水の在り方に、現代のストーリーテラーとしての作者アードリックの先住民社会と人類全体への願いが託されている。

引用文献

- Adamson, Joni. *American Indian Literature, Environmental Justice, and Criticism: The Middle Place*. Tucson: U of Arizona P, 2001. Print.
- Beidler Peter G. and Gay Barton. *A Reader's Guide to the Novels of Louise Erdrich*. Columbia: U of Missouri P, 2006. Print.
- Dennis, Helen May. *Native American Literature: Towards A Spatialized Reading*. New York: Routledge, 2007. Print.
- Erdrich, Louise. *The Beet Queen*. New York: Holt, 1986. Print.
- . *The Bingo Palace*. New York: Harper Collins, 1994. Print.
- . *Four Souls*. New York: Harper Collins, 2004. Print.
- . *The Last Report on the Miracles at Little No Horse*. New York: Harper Collins,

2001. Print.

---. *Love Medicine: A Novel*. New York: Holt, 1984. Print.

---. *Love Medicine: New and Expanded Version*. New York: Holt, 1993. Print.

---. *Tales of Burning Love*. New York: Harper Collins, 1996. Print.

---. *Tracks*. New York: Holt, 1988. Print.

---. "Where I ought to be: A Writer's Sense of Place." Wong, *Louise Erdrich's* 43-50. Print.

Rainwater, Catherine. "Ethnic signs in Erdrich's *Tracks* and The *Bingo Palace*." *Chippewa Landscape of Louise Erdrich*. Ed. Allan Chavkin. Tuscaloosa: U of Alabamap, 1999. 144-60. Print.

Countering Injustice in War and Terror: Julie Otsuka's *When the Emperor Was Divine*

Michael Gorman

In *When the Emperor Was Divine* (2002), American novelist Julie Otsuka explicitly addresses the U.S. government's maltreatment of Japanese Americans during World War II. While confronting the rationale for detaining Americans of Japanese descent in the 1940s, *When the Emperor Was Divine* raises questions about the Bush-Cheney Administration's intentional deviation from Geneva Convention standards in the present. Otsuka's text, in other words, challenges the narrative fabricated to rationalize detaining and torturing "enemy combatants" in the "War on Terror."

In the wake of the Imperial Japanese Navy's attack on Pearl Harbor, internment camps established by the United States and Canada relocated and confined over 130,000 citizens and residents of Japanese ancestry. Like Nazi Holocaust survivors and the women forced to work in brothels serving Imperial Japanese troops, Japanese American internment camp survivors and their heirs feel a need to tell their stories before the memory of these events burns out entirely.

But what relevance do mid-twentieth-century human rights abuses have today? According to Louis Bickford of the International Center for Transitional Justice (ICTJ), "how we remember and memorialize trauma in the past... can help prevent abuses in the future" ("Memory, War, and the Memory of War"). In other words, remembering WWII crimes against humanity may check future human rights abuses and help reform corrupt institutions. Acknowledging such evils is the first step in setting things right, in providing what is known as transitional justice, which the ICTJ defines as "justice in times of transition from conflict and/or state repression" (ICTJ).

In addition to providing reparations to victims and punishing offenders, transitional justice uncovers and disseminates the truth. Julie Otsuka's novel contributes to transitional justice by reminding readers about the removal and detention of Japanese Americans. Similar to the trials of Nazi collaborators, *When the Emperor Was Divine* teaches the world about a human rights lesson worth remembering. In fact, Otsuka's fictional text functions as a "critical history," one of the three historical modes—antiquarian, monumental, and critical—famously outlined by Friedrich Nietzsche. In the words of Louis Bickford, antiquarian history "sees history as quaint, curious, distant and irrelevant to our current lives"; monumental history "celebrates victory, heroism and tragedy in the past as precursors to current glory"; and critical history engages "with

the memory of the past, seeing the linkages between past, present and future... seeking to understand them" (Bickford).

Otsuka's novel serves as a bridge between the human rights violations associated with Japanese American relocation during the Second World War and the "enhanced interrogation" of enemy combatants in the War on Terror. Published just months after the detention facility at Guantánamo Bay began operations, *When the Emperor Was Divine* raises awareness about detention and forces readers to consider the ethical and moral questions regarding its use. In this way, Otsuka provides a counter-narrative to the monumental history that former Vice President Cheney and other Bush-era officials have been fabricating about the War on Terror.

Before Julie Otsuka confronted America's amnesia regarding Japanese American internment, the wall of silence surrounding this matter had been repeatedly challenged, but never entirely surmounted. Wartime relocation has been addressed over the course of several decades in histories, memoirs, novels, plays, poems, and documentary films. Until recently, however, such works have not had a tremendous impact outside academia. The readability of Otsuka's text combined with the relevance of her novel's subject matter to the execution of—and traumatic fallout from—the War on Terror is helping to change this.

According to cultural historian Dominick LaCapra, "A crucial issue with respect to traumatic historical events is whether attempts to work through problems, including rituals of mourning, can viably come to terms with... the divided legacies, open wounds, and unspeakable losses of a dire past" ("Trauma, Absence, Loss" 697-98). *When the Emperor Was Divine* addresses the "unspeakable losses" and "open wounds" associated with Japanese American internment. Paradoxically, the ineffability of the losses suffered by the families uprooted, detained, or deported during the Second World War lends voice to Otsuka's narrative as she relies upon tropes of absence and silence to depict the collective cultural memories haunting Nikkei Americans.

When the Emperor Was Divine portrays the 1942 exodus of a Japanese American family compelled to move from Berkeley, California, to the War Relocation Center in Topaz, Utah. Otsuka decides against naming any members of the family who are forced to wait out the war in the Utah desert. Individual family members are known only as man, woman, girl, boy or by their relationship to each other: father, mother, daughter, son. By depicting the experiences of an unnamed family, Otsuka's text functions as a collective cultural memory—unlike works by earlier Nikkei writers, such as Hisaye Yamamoto, who wrote from first-hand experience about wartime relocation.

The anonymity of Otsuka's fictional family also reflects the erasure of identity attending internment. Once assembled for relocation, Japanese American families were assigned numbers to keep them from being separated (23). While the reasons for these

identification tags may be benign, they bear an unfortunate resemblance to the system—the numbers, badges, and tattoos—Nazis used to identify people sent to concentration camps. The family's namelessness also speaks to the collapse of class distinctions behind the fences. With relocation, social standing before the war has lost its meaning, and, in this capacity, names are meaningless as signifiers of social status.

For the Japanese American families sent to one of the ten camps scattered across the United States, life would never be the same. Internment stopped time. Otsuka repeatedly evokes this image in the Topaz chapters of the novel. At camp, the mother loses track of what day it is (56), the daughter stops winding her watch the day she arrives (65), the calendar falls from the wall of the barracks (103), and the clock is eventually so clogged with dust it no longer works (103). The lives they knew before the war were over. Internment irreversibly changed families' lives and their style of living.

Otsuka employs the notion of absence to overcome the inexpressibility of the hardships suffered by internees. She repeatedly juxtaposes life in Topaz to that in Berkeley before the war. An obvious absence is water. Although Topaz is situated on the dry bed of an ancient salt lake, the closest community to the relocation center is ironically named "Delta" (48, 58-59). Of course, the most conspicuous absence at Topaz is the father, who was arrested and has been separated from the rest of his family since December 1941, just after the strike on Pearl Harbor. Sensory evidence of the father, from the odor of his shoes (66) to the outline of his face (72), gradually dissipates from memory while the family is interned in the Utah desert. The boy feels this sensation keenly. His thirst—his longing for one cold glass of Coke (59)—signifies a desperate struggle to remember his father, and his inability to clearly recall his father's physical features is symbolized by a water-like mirage viewable beyond the fences of Topaz. The hazy image of the father haunting the boy is manifestation of the trauma internment has caused him.

When the Emperor Was Divine unambiguously presents War Relocation Centers as a blot on the moral fabric of the nation. To reinforce this point, Otsuka repeatedly uses stain imagery to suggest the losses of property and liberty suffered by Japanese Americans as well as the negative effect war relocation had on America's reputation. The stain imagery echoes the actual phrasing used by Ansel Adams in *Born Free and Equal* (1944), a book of photographs taken at California's Manzanar Relocation Center, in which Adams decries the discrimination against Japanese Americans as "a truly regrettable stain on the record of our democracy" (101-02). Like the stains in Otsuka's novel, trauma lingers. Dominick LaCapra notes that although the "past is misperceived in terms of sheer absence or utter annihilation. Something of the past always remains, if only as a haunting presence or revenant" (700). Otsuka's text reflects the truth of LaCapra's statement. Absences, elisions, and intervals in *When the Emperor Was Divine*

do not supplant loss. Instead, they subtly indicate the presence of trauma and loss.

When the Emperor Was Divine is more than a work of historical fiction. Published in 2002, shortly after detention facilities at Guantánamo Bay began accepting so-called "enemy combatants," it is a primer about government assaults on civil liberties and a reminder that wartime internment is a living concern. Otsuka provides readers a frame of reference for viewing contemporary U.S. military policy, suggesting that the indefinite detention of suspected terrorists at known sites in Cuba and Iraq, and secret sites across Europe, mirrors the excesses of the Roosevelt Administration.

Since the beginning of the War on Terror, U.S. politicians have encouraged American citizens to ignore human rights abuses. This worries Louis Bickford of the ICTJ. "If former officials succeed in making us forget that there was torture and that it was contrary to our values," Bickford cautions, "they will establish impunity for the present and also for the future. That must not be allowed to happen. Extreme violations of human rights in any context, including a war, are too important to forget" (Bickford). Perhaps studying Otsuka's novel about WWII-era abuses as "critical history" can help Americans wrestling with a new era of wartime indignities begin an earnest examination of national values and serious scrutiny of the anti-terror policies of the Bush presidency.

Works Cited

- Adams, Ansel. *Born Free and Equal: The Story of Loyal Japanese-Americans*. New York: U.S. Camera, 1944. Library of Congress Digital Collections. Web.
- Bickford, Louis. "Memory, War, and the Memory of War." *The Huffington Post* 21 May 2009. Web. 21 May 2009.
- ICTJ. "What Is Transitional Justice." International Center for Transitional Justice. Web. 5 October 2011.
- LaCapra, Dominick. "Trauma, Absence, Loss." *Critical Inquiry* 25.4 (1999): 696-727. Print.
- Otsuka, Julie. *When the Emperor Was Divine*. New York: Knopf, 2002. Print.

科学と詩学が会うところー アウィアクタと原子をめぐるナラティブの挑戦

松 永 京 子

チェロキー族の血を引き、テネシー州ノックスヴィルに七世代目アパラチア地方人として生まれたマリルー・アウィアクタ (Marilou Awiakta) は、詩やエッセイのなかで、原子を隔離、分離し、機械のように制御しようとする直線的で破壊的な現代科学のナラティブを批判し、詩的で、生命を養う力を持つ原子のナラティブを提示した。本発表では、隔離や分離といった言葉に代表される原子のポリティクスが、〈進歩〉〈生体解剖〉〈トリアージ〉といった概念を広めた啓蒙時代の思想や科学、すなわち現代科学のマスターナラティブを継承していることを確認しつつ、カウンターナラティブとしてのアウィアクタの原子の詩学を検証する。

I アウィアクタとオークリッジ

1943年にマンハッタン計画の一環として建設されたオークリッジ国立研究所には、核兵器に使用するためのウランやプルトニウムの分離精製を目的に、X-10, Y-12, K-25といったコード名を持つ施設が置かれた。このときアウィアクタの父親が働いていたのが、電磁気的分離を行うY-12である。幼少期をオークリッジで過ごしたアウィアクタは、1978年に出版した詩集『永遠なるアパラチア山脈——山と原子が会うところ』(*Abiding Appalachia: Where Mountain and Meet*, 1978) のなかで、原子がアパラチアの山に「会う」ことの意味を次のように述べている。

ある人たちにとって、山と原子が会うところはテネシー州のオークリッジのような場所——突然作られ、フェンスで囲まれ、オークや松の尾根で見えなくなった原子炉で秘密裏に原子を分離する ("split") 場所。けれど私にとって、山と原子が会うところは、時間と空間を超えた魂 ("spirit")。山や原子、あるいは私たちの——時を経てこれらの山々を故郷と呼ぶようになったチェロキー族や開拓者やその他の住人の——心のなかにとどまる魂である。
(13)

アウィアクタは、splitとspiritという言葉を対比させながら、物理的かつ象徴的にフェンスで隔離された原子を「分離する(split)」この場所が、チェロキー族や開拓者、あるいはもともとこの土地に居住してきた人々にとっての「魂 (spirit)」であると述べる。ここでアウィアクタが「魂」と述べているものが、おそらくは〈精神的な故郷〉のようなものであることは、1993年に出版された散文集『セイラー——コーン・マザーの知恵を求めて』(*Selu: Seeking the Corn-Mother's Wisdom*, 1993) に窺うことができるだろう。「多くの人はオークリッジを外部からみ

て、危険で超現代的な場所、山脈の青みがかった霞の大波に浮かぶスペース・コロニーのように、遠くて異質な場所とみなした。私たちにあって、そこはホームだった」(143)。原子爆弾に必要な高濃縮ウラン抽出を目的として人工的に作られたオークリッジという町が、この場所に居住する人々にとっての〈故郷〉であるというアイロニーもさることながら、〈外部〉からオークリッジをみたとき、そこが「危険で超現実的な場所」と表現されていることも示唆的である。〈外部〉からやってきたものたちにとってオークリッジは、原子同様、他から隔離・分離されるべきもの、あるいは人間の手によってコントロールされるものとして存在していたのである。

ここでもう一つ注目したいのは、チェロキー族の血をひくアウィアクタが、北米先住民の抑圧の歴史を、同じく土地を奪われ離散したアパラチアの抑圧の歴史、さらにはオークリッジの原子支配の歴史に重ね合わせている点である。例えば、詩「起源 ("Genesis")」のなかでアウィアクタは、1940年代以降、核施設建設のために土地を奪われたアパラチア住民の姿を、西部のインディアン居留地へ強制移住させられ、離散を余儀なくされてきた北米先住民の姿に重ね合わせる(47)。さらに本詩では、原子もまた抑圧の対象とされてきた歴史が示唆されている。大量生産できるよう「アルファベットの記号でサイズ分けされ、プリカットされ、ブロックのような箱形にされて」(48) オークリッジに持ち込まれた家々のように、外から持ち込まれ、囲い込まれた原子は、国家の安全や進歩の名の下に隔離され、分離されてきたのだった。

オークリッジや原子を隔離や分離する対象、あるいは選ばれた者だけが知ることのできる秘密と見なす行為は、解剖用の人間の死体を人間としてではなく物体としてみる行為にも類似する。オークリッジや原子の隔離・分離が、それらを「遠くて異質な」ものと見なすことで可能となったように、生物体の身体を切り開いて観察する行為は、解剖者が対象物と精神的なつながりを断った時はじめて可能となるからだ。このように考えたとき、オークリッジや原子を分離・隔離してきた政府や科学者たちの行為には、対象物を〈他者〉と見なす現代医学や近代科学のあり方が反映されていたといえるのではないだろうか。

Ⅱ 近代科学と〈近代の暴力〉——ベーコン、デカルト、ホブズ

社会学者であり人権活動家でもあるシヴ・ヴィスヴァナサン (Shiv Visvanathan) は、強制収容所、遺伝子組み換え、そして原子爆弾などといった〈近代の暴力〉の起源は、フランシス・ベーコン、ルネ・デカルト、トーマス・ホブズといった啓蒙時代の科学者や思想家が広めてきた生体解剖、トリアージ、進歩といった概念にまで遡ることができると述べている(38-59)。自然の謎は人間の利益のために探求され、明らかにされるべきであるというベーコンの考えや、問題解決のためには複雑な全体をできるだけ断片化すべきとするデカルトの主張、あるいは自然は無政府状態の社会であり、機械を操作するのと同様にその秩序は統一されねばならないとしたホブズの思想は、人間による自然の介入と操作、生体解剖を含めた実験的方法の優先、また優先度を決定するトリアージといった科学的ヒエラルキーの確立に貢献してきた。

科学史の研究者、あるいはエコフェミニスト哲学者として知られるキャロリン・マーチャント (Carolyn Merchant) は『自然の死』(*The Death of Nature*) のなかで、近代科学や自然哲学の第一人者である十六世紀の哲学者フランシス・ベーコンを「自然を搾取する新しい倫理を提

唱した」(164) 重要な人物であると述べている。マーチャントは、新たな科学的知識や科学的方法による自然の支配を肯定するベーコンのナラティヴの、"hard" "penetrate" "thrust" といった言葉を含んだ「セクシャルな修辭的表現」に言及し、自然に対するベーコンの文体や言語的表現が、当時の社会における女性の立場や状況を反映しているだけでなく、こういった性的なイメージリーのなかで、自然の秘密を解明することが正当化されてきたと指摘している (171)。

さらに十七世紀には、マラン・メルセンヌ、ピエール・ガッサンディ、デカルトといったフランスの思想家たちによって、あらゆる現象を<機械>というメタファーを用いて解明しようとする機械論的哲学といった考えも広まっていった。デカルトの機械論的自然観は、自然論、生氣論、アニミズム信奉を否定し、自然を内部の力ではなく、外部の力によって働く「不活発な」粒子によって成り立つ「死んだシステム」とみなすことで、人間による自然の支配や操作を正当化した (Merchant 193, 195)。徹底した客観主義と冷静さを重視し、問題解決のためには複雑な全体をできるだけ断片化すべきであるとしたデカルトの考えは、彼の生体解剖への傾倒にも明らかだったといえる。

デカルトの機械論的自然観は、イングランドの哲学者であるトーマス・ホッブズにも影響を与え、ホッブズ独自の自然観へと発展することとなった。ジョニ・アダムソン (Joni Adamson) が指摘しているように、ホッブズは「原始的なキリスト教、アリストテレスの哲学、魔術、オカルト科学、そしてその他の神話形成における想像力全て」を「非科学的で不合理な信仰や慣習」とみなし、このような「扇動的な信仰や慣習で満ちた過去」を完全に排除してしまわない限り、新しい政治的秩序や倫理的秩序は成立しないと信じていた (171)。アダムソンは続けて、こういったホッブズの考え方は、非科学的な文明や部族文化を近代や進歩の対極にある<過去>として位置づけ、同化すべき存在、あるいは消え行く<他者>としてしまうことを指摘している (171)。このような直線的思考によって近代と過去に優先順位をつける行為は、医療現場における優先順位や選別を意味するトリアージという概念とも深く結びつく。ヴィスヴァナサンが述べているように、トリアージ、生体解剖、進歩の概念は、対象物を客観化し、<他者>を抹消することを可能とする科学的ヒエラルキーの形成に貢献してきた (48)。ヴィスヴァナサンはさらに、広島原爆投下は (1) 原爆投下の決断 (2) 被爆者への対応 (3) 現在も続く核研究といった三つの段階において、「生体解剖の暴力」を体現していると指摘しているが (48)、こういった<近代科学の暴力>は、原子を<他者>とみなし、分裂させてきた行為にも引き継がれてきたのだ。

Ⅲ アウィアクタの原子の詩学

アウィアクタはこのような支配的ナラティヴから原子を解放するために、詩や散文を通じて新たな原子のナラティヴを打ち出す。詩集『永遠なるアパラチア』のなかでアウィアクタは、「原子は私の幼少時代の詩——イメージやリズム。それはミステリアスで危険な美の存在」(79) と述べているが、原子は詩であり、イメージであり、リズムであるといった大胆ともいえるこの発想は、実は、アインシュタインやボーアといった科学者たちの原子のナラティヴとも多くを分かち合っている。アインシュタインやボーアが、原子の性質は従来理解されてきたよりもずっと適応性があるって予想不可能であるということを見抜き、原子を表現するためには言語の新しい用い

方をしなければならないことを提唱したように、アウイアクタもまた、「私たちの知覚ではアナロジーによってでしか核の世界を経験することはできない」(*Selu* 69)と述べ、人間が原子を理解するには、アナロジーという修辞法が必要不可欠であることを主張してきた。

しかしアウイアクタが原子にみいだした詩学のあり方は、修辞法の問題というよりも、むしろより現実的なサバイバルの問題に関わるものだった。アウイアクタはサバイバルのパターンを、「バランス、ハーモニー、包括性、協調性」といった生命のポエティクスに見だし、このパターンのなかで原子が、「自由に動き回って新しい生命を生み出している」(*Selu* 181)と述べる。このように、アウイアクタの提示する原子の詩学は、原子の性質が、生命の継続、すなわちサバイバルを体現していることを強調・肯定することで、私たちの生命を保証する詩学でもある。また、幼い頃アウイアクタの母親が、「原子の本来の姿に敬意を示して、原子と調和して生きていくことを学ばなくてははいけない」(*Selu* 66)とアウイアクタに教えたように、アウイアクタの詩や散文は、「ものごとは最終的な粒子に還元されない」("Reweaving the Future" 59)という点において合意することで、科学と詩学が「調和して生きていく」可能性が残されていることも教えてくれる。

<分裂><隔離><制御>のメタファーに支えられた近代科学のマスターナラティブの破壊力は、サバイバルの詩学を完全に凌駕してしまったかのように思われるかもしれない。しかし、<共存>や<生命>といった言葉へと結びつけることで、原子のナラティブはサバイバルのナラティブへと転化されていく可能性も持つ。そういった意味においてアウイアクタの詩学は、マスターナラティブに対抗するカウンターナラティブとしてだけでなく、新たな原子のナラティブとして読まれることができるという点に意義があるといえるだろう。

引用文献

- Adamson, Joni. *American Indian Literature, Environmental Justice, and Ecocriticism*. Tucson: U of Arizona P, 2001.
- [Awiakta] Thompson, Marilou Bonham. *Abiding Appalachia: Where Mountain and Atom Meet*. Memphis, TN: St. Luke's P, 1978.
- . "Marilou Awiakta: Reweaving the Future." Interviewed by Thomas Rain Crowe. *Appalachian Journal: A Regional Studies Review*. Fall 18.1 (1990): 40-54.
- . *Selu: Seeking the Corn-Mother's Wisdom*. Golden, CO: Fulcrum, 1993.
- Merchant, Carolyn. *The Death of Nature: Women, Ecology and the Scientific Revolution*. 1980. New York: HarperSanFrancisco. 1983.
- Visvanathan, Shiv. "From the Annals of the Laboratory State." *Alternatives* XII (1987): 38-59.

福屋利信著

『ロックンロールからロックへ—その文化変容の軌跡』

(近代文藝社、2012年6月15日 四六判、386pp)

今石正人

本書の構成は以下の通りである。

- 第1章 アメリカの夢の変遷—フロンティアからスカイラインへ
- 第2章 ロックンロールに至るまでのアメリカ音楽史—ブロードサイドの歌からリズム&ブルースまで
- 第3章 ロックンロールからロックへ
- 第4章 エルヴィスとアメリカ南部
- 第5章 ボブ・ディランの変化
- 第6章 60年代対抗文化の意識とロック
- 第7章 70年代における対抗文化の行方
- 第8章 ポスト対抗文化とイーグルス
- 第9章 ロックとジーンズ

本書のいくつかの章は、中四国アメリカ文学会や日本ソロー学会での口頭発表をもとに『ヘンリー・ソロー研究論集』に載せた論文、宇部市での「ビートルズ講座」の番外編「ポップスの歌詞を科学する講座」や鹿児島大学での大衆文化論集中講義に基づいている。また伊藤詔子氏監修の『オルタナティブ・ヴォイスを聴く』や『カウンター・ナラティブから語るアメリカ文学』に収録されている論文を基にしたものもある。

「ロックンロールの言葉にならない怒りを言語化したものがロックだ！「約束の地—The Promised Land—」をキーワードにアメリカの移民史とロック史との関係を、音楽社会学の視点から読み解く」と帯の文句にあるように、本書は1960年代の対抗文化を中心に、アメリカ史、音楽史、社会史とその時代精神、世代論や都市論などを二項対比（対立）という鋭利な刃物でスライスし、その鮮やかな切り口を見せてくれる。その二項対比は、例えば「ロックンロールの野生とフォークの知性が融合しロックが誕生」、「60年代の集団主義 vs 70年代の個人主義」、「黒人労働者階級のブルースとリズム&ブルース、白人労働者階級のロックンロールとカントリー、白人中産知識階級のフォーク、白人と黒人の知識階級のジャズ」というように、社会階層や人種、年代を音楽ジャンルと組み合わせ対比することで、物事の本質を鮮明に浮かび上がらせる。あるいはイーグルスの「ホテル・カリフォルニア」のイメージを、「アメリカ南部のメンフィスに生まれた反逆の音楽が、北部のニューヨーク周辺の知性に晒されてメッセージ性を獲得した後、西海岸のサンフランシスコで栄光と挫折を経験し、ロサンゼルスから砂漠を駆け抜けようとする途中で立ち寄った「とあるホテル」で八方塞がりの状況を迎える」（3章）と、50年代から70年代の音楽史と重ね合わせる。

このような歯切れのいい括り方で文化の流れと変容を読むと、読者は氏に導かれて見晴らしのいい場所に案内され、60年代という山頂からアメリカ文化史を眺望できたという印象を持つであろう。概念的・抽象的な鳥瞰図でありながら無味乾燥に感じないのは、トピックに関する先行文献の丹念な渉獵と引用がなされ、音楽に関する具体的で文学的な分析・解釈があり、各都市固有の息づかいが書き込まれ、トピックの理解を深めるのにふさわしい映画が紹介され、さらに日本の音楽界や若者文化の記述もあり、それが本書を立体的な奥行きのあるものになっているからであろう。

第1章ではアメリカ誕生神話と、農本主義から産業資本主義へと発展するアメリカ史と多民族間の対立・抗争を俯瞰する。そして1920年代以降の「巨大な力」が支配する社会に対して「どうにもならない」怒りをぶつけたのが50年代のロックンロールで、それを「どうにかしよう」と叫んだのが60年代のロックであると論じる。

第2章は政治性が強く表に出たブロードサイドの歌から始まり、カントリー・ミュージック、ミンストレル・ショー、ブルース、ゴスペル、ジャズ、リズム&ブルースまでの音楽史である。ロックンロールの誕生に直接関わったリズム&ブルースは「ゴスペルの魂を高揚させるような本能的リズム、ブルースの黒人性、ジャズの音楽的洗練が合体したハイブリッド音楽」と整理する。

第3章が本書のタイトルである「ロックンロールからロックへ」を扱った章である。まず氏は50年代始めにリズム&ブルースがその黒人性を薄めつつ白人の若者世代に受け容れられ易い音楽へと変容しロックンロールが誕生し、エルヴィス・プレスリーの登場で全米の若者の心を捉えるが、60年代初頭には急激に失速してしまうと述べる。逆にイギリスへ輸出されそこで開花したロックンロールは、ビートルズやローリング・ストーンズなどに影響を与え、閉塞状況にあったアメリカのロックンロール界を活性化したと主張する。

ボブ・ディランがイギリスのロック・グループに刺激されて1965年の「ニューポート・フォーク・フェスティバル」にロックンロール・バンドを連れて登場したことが、60年代の新しい音楽であるロックが誕生した瞬間である。ロック音楽の頂点は「ウッドストック」であったが、その半年後開かれた「オルタモント・フェスティバル」には労働者階層を中心とした若者が集まり警備をめぐって混乱が起こり「愛と平和」の精神は粉碎される。こうして50年代の若者の反体制意識とロックンロール、60年代の対抗文化とロック、1969年の対抗文化の満開期とロック文化の頂点、70年代の対抗文化凋落とロック・スピリットの終焉とが重なり合うと概括するが、70年代以降、対抗文化は凋落したという定説に対して第7章で反証を加えている。

第4章ではエルヴィスとアメリカ南部に焦点を合わせて、「社会的概念としてのエルヴィス」を分析する。エルヴィスは当時の労働者階層の若者の上昇志向や非言語的反逆の行動様式の総体を体現し、50年代のエルヴィス現象はまず南部の若者を、続いて全米の若者を親の世代の呪縛から解放したが、自らを南部から完全に解放できなかったと結論づける。

第5章ではボブ・ディランに焦点を合わせ、エルヴィスに大きな刺激を受けたディランは、ロックンロール精神が牙を抜かれた状態に陥っていく中で、新しい刺激を求めてフォークに赴き、「ロック・エイジ」の精神文化創造の中心的役割を担ったと論じる。また「風に吹かれて」と「ひどい雨が降りそうなんだ」の歌詞を分析し、後者を環境批判的に読み解く。

第6章では英米の対抗文化の特徴が対比的に描かれる。英国の対抗文化はロンドンに居場所を

見つけた都市型社会志向主義であり、現実的、経済的、消費的であるのに対して、アメリカの対抗文化は大都市を離れて自然のなかに居場所を見つけようとする自然至上主義であり、「自然との融和」「愛と平和」「反戦・反体制」を唱える理想主義的、政治的、自給自足的であると指摘する。また対抗文化の中核にあった、チャールズ・ライクの『綠色革命』の「意識Ⅲ」は、政治や経済や文化システムが国家と大企業を軸にして統合され国民を支配する「統合国家」から若者を解放し、自然と共存しつつ人間性を回復しようとする意識だとまとめる。

第7章は、対抗文化が掲げる理想主義は70年代には跡形もなく雲散霧消し、最後にはジーンズと自然食だけが残ったという定説に反証を加え、60年代精神は70年代以降も生き延びていることを実証する。70年代から音楽シーンに登場するシンガーソングライターは「自分自身を忠実に映し出した歌と、音楽産業の商業的な意向を極力排除した簡潔なサウンド」を目指したと指摘し、ここにも60年代対抗文化精神の発露を見る。80年代の「ライヴ・エイド」、90年代オノ・ヨーコの「世界緑化革命」提唱、9・11報復攻撃の大合唱のなかでレノンの「イマジン」が歌われたことなどを挙げ、60年代の最良の部分は70年代の内省を経由して21世紀にも伝わっていると主張する。

氏は、音楽が演奏される現場にいて音楽の流れに全身を投じるという陶醉体験と、その体験を言語化するには力業が必要だということを知悉しているように見える。例えば氏が、「ディランの歌詞は言葉だけで完結するものではなく、歌の歌唱法やバックのサウンド、さらにライブ演奏などでの非言語による伝達部分とともに語られ分析されるべきであるというスタンスを、自戒の念も込めて、強調しておきたい」（5章）と言うとき、氏は言語を使って音楽を語ることの限界を十分わきまえた上で、歌詞がその時代の精神を表象しまた時代がその歌詞で読み解かれることを、豊富な知識と自身の感性を通して追求しようとしている。その一つの試みが第8章のイーグルスの「ホテル・カリフォルニア」の歌詞分析で、その「脱構築批評」的「ポスト構造主義」的分析と解釈は刺激的で興味深い。この歌詞から読み取られるアンヴィバレンツは、反体制的な60年代的マインドとビジネスライクな80年代のマインドのはざままでイーグルス自身の葛藤が投影されているからだとして氏は結論する。

第9章は60年代対抗文化の精神的拠り所であったH・D・ソローの衣服観から説き起こし、それが対抗文化の衣服観にどのような影響を与えているかを検証し、60年代若者のユニフォームであったジーンズの身体性と精神性を分析する。

「あとがき」では、50年代のロックンロール誕生までのアメリカ史を「北」と「南」の対立を座標軸にして俯瞰し、アメリカの神話や多くの歴史的な出来事が「北」を中心に展開してきたが、こと大衆音楽に関しては「南」が主流を形成したことを確認し、60年代南部発のロックンロールが北部のニューポートでロックに変容した後の歩みを、「東」と「西」という座標軸を使って対抗文化の特徴を織り込みながら復習する。若者文化はかつてのフロンティアの西漸運動のように「西」に大移動し、カリフォルニアでその文化を開花させるが、そこではかつての「南北」間のような対立ではなく、「東西」の連帯構造を作り出し、その「横」の連帯意識が競争社会アメリカの「縦」の社会階層を否定しようと試みたことと概括する。80年代以降のロックは急速に巨大音楽ビジネスに取り込まれ、ロックの反体制的性格はいまでは一部のインディーズによって細々と継承されていると認めざるを得ない。

山下興作

しかし「あとがき」の後半では、かつて一時代を画したロックへの希望と期待を、60年代的な理想主義を貫こうとするディランと、環境問題にコミットするという現実主義な選択をするイーグルスに託している。ロック・スピリットとともに、60年代対抗文化の価値観は21世紀のわれわれが継承するに値する叡智と指針を与えてくれるはずであり、60年代文化とその強力な伝達媒体であったロックンロールとロックは再評価する価値があると説く氏には、冷徹な研究者というより熱っぽい口調で語りかける伝道師の姿勢を感じる。それはともかく、音楽というレンズを使ってアメリカの文化史と変容を鳥瞰・虫瞰する氏の仕事がアメリカ文化研究にとって大きな収穫であることは間違いない。

日本ソロー学会編

『ソローとアメリカ精神—米文学の源流を求めて』

(金星堂、2012年10月、ix+361頁、本体4,500円+税)

山下興作

本書はアメリカ文学に多大な影響を残したヘンリー・デイヴィッド・ソローに関して、その没後150年を記念して多くの若手を含む22名の研究者が執筆した論文を「ヘンリー・ソローの著作」「歴史の中のヘンリー・ソロー」「ヘンリー・ソローとラルフ・エマソン」「ヘンリー・ソローと知識人」の4部にまとめたものである。

その第一の目的は「はじがき」に記されているように、「ソローの著作が、どのようにアメリカ文学やアメリカ人の心に広い影響を及ぼしたかを探究」し、ネイチャーライティングの「原点をソローに見出し、現代におけるソローの意義を探究し、アメリカ文化の原点としてのソローを位置づける」ことであるが、第3部と第4部が示すように、対象をソローに限定せず、エマソンやホーソン、ルイザ・メイ・オルコットなどコンコードゆかりの文学者をもその視野に収めていること、またソローを巡る当時の政治的状況や言説にも目配りし、社会改革家・社会批評家としてのソローの活動とその影響力を探究することを目指している。

以下、各論文の概要を記すと、第1部では、作家の主要作品を分析し、アメリカ人の自然観を探究する。佐藤光重「農場は舞台—「マメ畑」、「ベイカー農場」における建国史の寓話」は、タイポロジー文学としての「ベイカー農場」の原型を失樂園に見出し、そこにアメリカの理想と現実の乖離を読み取ることで、『ウォールデン』におけるタイポロジーと寓話の関連を探る。

竹内美佳子「ソローの瞑想的パストラル—『コンコード川とメリマックの川の一週間』」は、亡き兄へのエレジーとして書かれた牧歌的な船旅の記録が、同時にアメリカの領土拡張主義や産業主義のイデオロギーに抵抗するソローの高度な精神性を描いていることを明らかにする。

中垣恒太郎「旅行文学としての『コンコード川とメリマックの川の一週間』」では、産業の発達に伴う生活様式や街の光景の変化を背景に起こった旅行文学ブームの中、ソローがどのように

自身の旅行文学を捉えていたかを分析する。

岩政伸治は「テリー・テンペスト・ウィリアムスが示したソローのレトリック」で、エコクリティシズムのもつ修辞的戦略をソローの作品に見出し、ソローをエコクリティシズムの源流のひとつに位置づけようと試みる。

上岡克己「ソローとウィルダネスー『メインの森』再考」は、ロデリック・ナッシュ『ウィルダネスとアメリカ精神』(2001)の中で、「ヘンリー・ソロー 哲学者」が論じられていることに着目し、ソロー自身のウィルダネス体験が最も色濃く反映されている『メインの森』を取り上げ、ソローのウィルダネス観がアメリカ人の精神形成に及ぼした影響について論じる。

小澤奈美恵「『メインの森』のペノブスコット族—ソローが描かなかったもの」では、マニフェスト・デスティニーの影響を受けていたソローの先住民観が、彼がガイドとして雇ったペノブスコット族との接触によって変容していく様を描きつつ、ペノブスコット族の歴史と社会を解説しながら、「消えゆくインディアン」の中で生き抜こうとする彼らの強い意志を明らかにする。

山田久美「異邦人への眼差し—ソローのカナダ紀行」は、ソローのカナダの旅が、メインとコッド岬への旅の間、そして森の生活の終焉から『ウォールデン』出版までの間に行われたことに着目し、この旅が作家のアメリカ精神形成に果たした役割を強調する。

小野和人「非日常空間としての夜—作品『月』について」は、日本ではなじみの薄いソローの遺作を紹介しながら、「夜」自身の存在と人生を見つめ直し、理想の自己を見出す作家独自の自然観を描き出す。

第2部では、ソローの政治に関する意見を取り上げ、その先見性を探る。山本洋平「明白ならざる運命—『ウォールデン』における動物表象」は、近年の動物論の成果を援用しつつ、ソローの動物をめぐる思想と描写モードに着目し、歴史的、政治的な文脈、とりわけ人種問題の中に位置づけようとする。

山口敬雄「帰化する種子—Thoreauの *Cape Cod* と移民」は、大西洋岸で遭難したアイルランド移民船の目撃体験を手掛かりに、同時代に移民問題をめぐってアメリカで沸き起こっていた議論を検討し、19世紀半ばの移民言説とソローのネイチャーライティングとの相互補完的な関係性を明らかにする。

歴史家エリーズ・レミーアは『ブラック・ウォールデン』(2009)で、ウォールデン近くの森に居住した黒人を解説したが、深瀬有希子は「コンコードの「空飛ぶアフリカ人」—所有と継承をめぐる問題」で、この「先住者」に関するソローの記述とノニ・モリソン『ソロモンの歌』(1977)における黒人描写とを、「空飛ぶアフリカ人」という黒人フォークロアを介して分析する。

高橋勤「『ウォールデン』における奴隷制表象—「より高い法則」をめぐる」は、ソローが9年の歳月をかけて『ウォールデン』を推敲した経緯に着目し、40年代から50年代にかけての奴隷解放問題を中心とした政治思想の移り変わりがテキストに反映されていく経緯を考察する。

伊藤詔子「<ブラック・ウォールデン>とソローの8月1日—3.11後に "Paradise (To Be) Regained" を読む」は、エリーズ・レミーアは『ブラック・ウォールデン』が提示した最新の資料を駆使して、『ウォールデン』の中の逃亡奴隷と独立後解放されて湖畔に住んだ元奴隷の記述に言及し、ブラッドレー・ディーンが探し当てた「豆畑」が、彼らの居住した場所に近くであった事実を指摘し、そこからコンコードに生きた黒人たちの挫折を考察する。

藤田佳子「ソローからミューアへー自然感覚における継承と変容」では、ネイチャーライティングの原点にソローを位置づけ、現代へと続くその伝統の中間地点に位置するジョン・ミューアまで自然感覚のある側面が継承される一方で、自然をみる自我のあり方が変化していく様を論じる。

第3部は、ソローに大きな影響を与えたエマソンの思想を分析し、ソローと関連づける。佐久間みかよ「エマソンのネットワークングとソロー」はエマソンを中心とした知識人グループの中でソローがどのような働きを果たしたか、また知識人のソーシャル・ネットワークングの役割について考察する。

小倉いづみ「エマソンとソローにおける言語と象形文字」では、エマソンの「言語」と『ウォールデン』の「土手の雪解け」を比較検討して、エマソンと同様に、既成の枠組みからの「解脱」求め、新しい世界を再構成しようとするソローの姿が描き出される。

堀内正規「エマソンの自然－岩田慶治の〈アニミズム〉の視点から」は、文化人類学者岩田慶治の〈アニミズム〉の視点とメルロ・ポンティの身体論を結びつけ、従来「神秘主義」とみなされてきたエマソンの自然との交わりを身体経験として読み直し、ソローとの差異を考察している。

高梨良夫「運命、本能、カーエマソンの後期思想の考察」は、エマソンの後年のエッセイ「運命」や後期講演集に焦点をあて、エマソンの科学的で倫理的な側面に注目し、青年期の超絶主義的自然観との差異を明らかにする。

第4部はソローと関わった政治家や知識人を扱う。松島欣哉「十九世紀アメリカの国民文学意識と超絶主義者たち」はエマソンの「アメリカの学者」をはじめとして、オレスティーズ・ブラウンやマーガレット・フラーに言及しながら、ソローの国民文学意思、ひいてはアメリカにおける国民意識の形成をたどる。

井上博嗣「ソローとホーソーンの文学的交流」では、2人の交流を解説しながら、作品は対照的にも関わらず、共通点も多い作家の姿を、コンコードの歴史を背景に描き出す。

小野由美子「ルイザ・メイ・オルコットのソロー観」は、ソローをモデルとしたと思われる *Moods* の Adam Warwick、*Work* の David Sterling、*Eight Cousins* の Uncle Alec の三人の描写の分析から、ソローの人間観、哲学、教育者の側面を探究する。

白川恵子「奴隸的不服従－ルイザ・メイ・オルコットのセンセーショナル・スリラーにおける抵抗と復讐」はオルコットの短編に表象された奴隸の復讐の中にソロー的な不服従の精神を読み取り、作家の「自我」表明の背後にソローの姿を透かし見る。

こうして概観してみると、若手のアクロバティックなまでに意欲的な論考から安心して読めるベテランの重厚な考察まで、バラエティに富み、刺激に溢れた論文の数々が収められていることに改めて気づかされる。このことはソローという作家とその作品の懐の深さをも表しているようで興味深い。また、巻頭に付された28葉の図版も、関連する論文と合わせて眺めることで、より興味をそそるものとなっている。

入子文子監修 谷口善郎、中村善雄編

『水と光——アメリカ文学の原点を探る』

(開文社出版、2013年2月、382ページ、本体3,600円+税)

上 西 哲 雄

入子文子と言えば20年ほど前、日本英文学会の『英文学研究』に載った氏の『緋文字』に関する論文を読んだ時の興奮を忘れることが出来ない。実はタイトルさえも内容までも良く覚えていないのだが、キリスト教を扱うのに、よくある神学的あるいは思想的な面からのアプローチではなくて、舞台となった時代の教会の制度や法律の分析や評価から物語を読み解こうとするもので、研究の方向の定まっていなかった筆者に大きな示唆を与えてくれた。その時の衝撃だけは、忘れたことがない。その入子文子が2013年3月を持って関西大学を退職された。多くの直接親交のあった研究者のみならず、筆者のように間接的に氏に学んだ者も含めて感慨を催す者は少なくあるまい。その退職を記念して企画されたのが本書である。

タイトルの『水と光』について詳しくは、その「まえがき」を読んで頂きたいが、合衆国建国の祖達が〈水〉を渡り、新しい〈光〉を求めてアメリカ合衆国の礎を築いたことを原点とするとの認識による。しかし水と光と言えば、聖書に造詣のある氏のことであるから、創世記の冒頭で世界の初めに水があったこと、神がこの世界に最初にもたらしたものが光であったとの記述があることに想を得たかと思うのが自然だろう。しかし「まえがき」では、ことさらそのことに言及した上で着想の源が聖書であることを否定し、偶然の一致だとする。真意はともかく、わざわざキリスト教の枠組みを外す意図は、各論考に頁を進めるとよく分かる。どのような枠組みにもとらわれない自由闊達なアメリカ論、アメリカ文学論がにぎやかに繰り広げられるのである。

執筆陣とその対象を紹介すると、次のようなラインナップだ。アメリカ大陸に植民を始める頃のイギリスの貴族ウォルター・ローリーの大洋を歌う詩を扱う水野眞理、ホーソーンの『緋文字』に出てくるボストンの海に注目する入子文子、南北戦争期の南北両社会を互いを光と影になぞらえて行く文化の様相と解き明かす巽孝之、ポーの詩に描かれる水を紹介する伊藤詔子、ホーソーンの『七破風の館』の登場人物の孤独に光を読む妹尾智美、メルヴィルの『戦争詩集』に盛り込まれた海戦を描いた詩を紹介する舌津智之、19世紀演劇の事例から当時発明されたばかりの電球がスペクタクルを生み出す様子を説明する常山菜穂子、ヘンリー・ジェームズの『使者たち』、「檻の中」に出てくる電信や電灯が物語の展開をどのように推進しているかを示す中村善雄、聾啞の社会活動家であるヘレン・ケラーが知識の獲得を光として生き抜く様子を自伝に読む里内克巳、ヘミングウェイの短編小説「白い象たちの山並み」をコーパス言語学で分析し隠れた意味を明らかにする疋田知美、フォークナーの「乾いた九月」の結末における登場人物の笑いの意味を降雨を含む気象の表象とからめながら説明する谷口義朗、フォークナーの『行け、モーセ』とモリソンの『ピラヴィッド』に見られる奴隷制度表象を俯瞰することで見えてくる光に注目する山下昇、飛行士リンドバーグの妻アン・モロウ・リンドバーグの人となり『海からの贈り物』に注目し

ながら海との関わりを軸に紹介する吉原あけみ、テネシー・ウィリアムズの『牛乳列車はもう止まらない』が光と影の使い方で日本の歌舞伎の影響をどのように受けたかを示す古木圭子、アメリカの絵本の中でもアメリカの自然を扱うものおよそ50冊を選び出し分析を試みた石原敏子、シルヴィア・プラスの短い自伝的エッセイ“Ocean 1212-W”における神話化の過程で海が重要な意味を持つことを指摘する武藤脩二。

タイトルから察せられるように、水と光を一応は手がかりに論を着想しているものの、アメリカ文学の原点とは何かについて、めいめいに思うところを自由に論じている。たとえば、それぞれの論考のテーマを水と光に分類すると、圧倒的に光を扱ったものが多い。全体としてのバランスやテーマの一貫性あるいは有機性を云々するなら、問題があるかもしれない。しかし一読すれば、そうした枠をはめなくて良かったと思わせる粒よりの好論文が揃っている。執筆者にはアメリカ文学研究では名うての実力者あるいは大御所とも呼べる顔ぶれが揃っており、入子が共に切磋琢磨してきた研究仲間を糾合し、まずは自由に論じてもらったということであろうか。そしてこの執筆陣の中に当支部の仲間が、伊藤詔子、中村善雄、里内克巳と、三人までも名前を連ねており、中でも中村が査読・編集に携わったことは喜ばしい。以下では、ごくごく簡単に三人の論考を概観してみたい。

伊藤詔子氏の「ポーの水とダーク・キャノン——[丘上の都市]から「海中の都市」へ——」は、のっけから「ポーの文学は水の文学であり、常にそれは一貫して死と結びついている」とずばり宣言することから始まる。「はじめに」では、ごくごく簡潔にしかし的確に先行研究を言及しながら、ポー文学において水と死は結合することで、主流文学の流れとは違うダーク・キャノンとゴシック文学の伝統の基礎を形成すると共に、時代につながる契機にもなるとする。具体的には、最初期の「湖に」(1827)から始まって、1840年代の「眠れる人」(1841)、「夢の国」(1844)、「海中の都市」(1845)と、4篇の詩を取り上げて論じる。そもそもポーの詩には水の底の墓というモチーフがあるが、最初期の「湖に」も例外ではない。ポーの故郷であるヴァージニア州からノース・カロライナ州に広がる湖沼地帯ディズマル・スワンプのドラモンド湖という文学的に有名な湖を舞台とする「眠れる人」は、死んだ女性が眠る谷間に水がしたり落ちて満たしていくというイメージである。ここで伊藤は、ポーの母親および母的存在の女性の死を簡潔に紹介し、死んだ女性をモチーフにする背後にはこうした死せる母達への合一願望があることを示唆する。「夢の国」について伊藤は、以上のような「沼地的トポスの総決算とも呼ぶべき旅路の果てに到達した詩」とする。そこでは時間と空間の境界が崩壊していく様が念入りに頭韻や踏韻を踏みながら繰り広げられる。「海の都市」は、海の底に死んで沈む都市を描いて、「夢の国」と同じく普遍的な文明批評を感じさせるものとする。この詩はもともと1831年に書かれたものが1836年に一度、そして1845年に現在の形に改稿された。伊藤は、この過程でヨーロッパ的なものがアメリカ的なものへと改変された点に注目し、そこにアメリカ的ヴィジョンを意識的に崩壊させるディストピアのヴィジョンが表れるとする。最後に、ポー文学が絵画の世界に様々なイメージを提供してきたことを指摘した上で、シュールリアリスト、ルネ・マグリットがアルンハイムの風景を繰り返しモチーフとしたことに注目し、この作品をポー文学がポストモダンに継承された究極の形として稿を終える。

ポー文学の大御所、伊藤詔子が期待通りポー論を寄せるように、中村善雄も期待通りヘンリー・

ジェイムズ論を寄稿している。しかもタイトルが「メディア論者としてのジェイムズ——光と伝記のイメージを読み解く——」と、英米の伝統的な上流階級の風俗を描く作家としてのイメージが強いジェイムズの論考としては、大変刺激的かつ挑戦的なテーマとなっている。とは言え、最近の先行研究ではジェイムズの文化史的な側面が注目され始めていることを紹介した上で、中村は電灯と電信を取り上げる。電灯については『使者たち』(1903)における使われ方に注目する。舞台となるパリを彩る街灯が、光が照らす街の表層とその向こうの影に潜む深層を生み出し、時には都市の内実を開示し時には隠蔽することで、物語の進行の推進力となっていると分析する。特に、取り巻く事態への登場人物の洞察が、こうした光による表層と深層の交換によってよく表現されているとの指摘は説得力がある。一方、電信については、中編小説の「檻の中」(1898)を使って論じる。物語は貧しい電報技手が顧客の電報を読んで勝手に想像力を膨らませ、ついには勝手に電報の内容を書き換えてしまうという、まさに電信が主人公と言ってもいいような内容だ。こう書くと、電報技師は電報を操っているかのようにだが、中村によれば電報技師はむしろ自らの想像に、とりもなおさず電信に振り回されているとする。二つの作品を並べた上で、このように読むことによって中村は、ジェイムズが電灯や電信を単に作品の背景となる装置として扱っているのではなく、それらが登場人物達の心理におよぼす影響をむしろ問題にしていることを浮き彫りにしようとする。ジェイムズの描く世界はともすれば、外界から独立した心理の世界という印象をしばしば抱きがちだが、むしろ外の世界、それも最先端の文化事象を物語の骨格に据える作家という側面が浮かび上がる。

日本のマーク・トウェイン研究の第一人者としての地位を確立している里内克己が本書に寄せたのは、実にヘレン・ケラーだった。「光を得るヘレン・ケラー——『私の人生の物語』における自己生成と社会意識——」で里内は、伝記をフィクションとして読むことの意味を解き明かした上で、『私の人生の物語』(1903)には19世紀アメリカ文学の伝統のひとつとも言える奴隷解放物語のパターンを読み込もうとする。言うまでも無くヘレン・ケラー女史は奴隷でもアフリカ系でもないが、聾啞という境遇のために精神的・知的なレベルで闇の中に閉じ込められていたところから、覚醒した自己へと解放される物語となっているというわけだ。ヘレンによる自らの人生の物語は、幼い頃の黒人の子どもたちとの交遊に黒人との取替え可能性を読み、また奴隷解放運動で有名な詩人ジョン・ホイットリアがヘレンの師サリバン女史を奴隷解放者になぞらえることを紹介することで、自らの当初の奴隷的な立場と精神的・知的解放を、奴隷解放の物語に重ねるとする。この自己解放の物語のクライマックスは、20章のハーバード大学への入学だが、同時に大学教育に対する失望が詳述されていることに里内は注目する。解放物語の型がそのまま当てはまるのであれば、本書は里内が言うように文学的に受け止めて読んだ時、取り上げるほどのものではないのかもしれない。この章でヘレンが、大学教育の(とりわけ文学教育が)知的理解偏重になっていることをユーモアで包み込みながら批判する洞察と筆力を、里内は評価する。知的解放の果ての知育偏重批判は、逆にヘレンの知的な深まり、真の光を感じさせるものである。実は自伝はここで終わり、その後は読書についてや、ホイットリアとの出会いなど、独立したエッセイからなっている。そこでは、知的に深化したヘレンによって文学、人生、そして社会に対する考えが味わい深く語られている。このように文学作品として高く評価できるテキストを聖女の伝記に祭り上げてしまう読者は、ヘレンが大学批判に見せたような心の光を、本当に理解しているの

だろうかと、里内は問いかけて筆を置いている。

当支部の3人の論者のものだけを取り上げても、ポウ、ジェイムズ、ヘレン・ケラーという風に対象のパラエティ、そしてアプローチの、正当なる文学研究、文学テキストの文化的側面の分析、自伝の文学テキストとしての解説という三者三様のスタイルに、本書が十分に読みごたえと多様性に満ちたアメリカ論集となっていることが集約されている。

伊藤詔子監修、新田玲子編集

『カウンターナラティブから語るアメリカ文学』

(音羽書房鶴見書店、2013年10月、378頁)

吉田美津

本書は、「まえがき」で監修者伊藤詔子氏が語っているように、氏の四十数年に及ぶ研究と教育の節目となる「退職記念誌」を意識しつつ、広島を中心にこれまで共に研究してきた方々と協力して企画された論文集である。執筆者はエコクリティシズム研究では第一人者のスコット・スロヴィック氏をはじめ、伊藤氏の指導を受けて研究者となった方々を含め総勢19名である。ここでは、伊藤氏による「まえがき」を中心に紹介することで、「書評」というよりは、本書の魅力の一端に迫りたいと考える。

「まえがき」は「ソロー、カーソン、広島」という副題がつけられており、ナラティブとアメリカをめぐる優れたエッセイとなっている。伊藤氏はまず、アメリカ文学には「国民全体が共有しているように見えるナショナルナラティブ」と「共同体で信奉されているマスターナラティブ」、そして「それに抵抗し対抗するカウンターナラティブ」があるとし、それらのナラティブの形は、エスニシティグループや地域、階層、そしてジェンダーの要素と絡まり合い多様な関係性のなかで構築されてきたとする。そしてホミ・バーバの「ナラティブの権利」を援用し、ナラティブの権利には「行使される状況についても注意が払われるべきである」という「審美的・倫理的解釈の責任」も伴うことにも言及する。したがって、ナラティブは多文化による複雑な交錯と葛藤に巻き込まれるゆえに、転覆や循環がおこり、カウンターナラティブがマスターナラティブへと変貌することもある。

さらにナラティブを文学ジャンルとして確立した形態として捉えることも可能である。伊藤氏は、アメリカ文学におけるそれらの形態としてスレーヴ・ナラティブ、西部についてのフロンティア・ナラティブ、1960年代から継承されてきたロード・ナラティブ、そしてホーソンやポーにとってロマンスやノヴェルに対してのナラティブ<本当にあった物語のような真実の話>を挙げて、本書のタイトルともなっているカウンターナラティブへと論を進める。

伊藤氏は、本書の「カウンターナラティブが向かうのは、そうした狭義のジャンル名を超えて、文化の胎動、あるいはもっと幅広くレトリックの構造や戦略の意味で使われ、必ずしも作者の意

図にはなく、深い読みが探り当てるテキストの無意識の領域といえるかもしれない」と述べる。本書におけるカウンターナラティヴは、限界のあるジャンルの領域を超えて、「レトリックの構造や戦略」のなかにある「テキストの無意識の領域」に見出されるものに向かうという理解である。それを如実に示しているのがアメリカ文学であり、アメリカ文学にはカウンターナラティヴの「無意識の領域」が連綿としてあるのではないかと暗示する。「アメリカ文学の一番のおもしろさは、やはりアメリカという国の成立に内在していた、旧世界的政治と文化と宗教の主要な潮流や趨勢に対する、生き生きしたカウンターナラティヴの多元文化的かつコスモポリタンの形成力にあるのではないかと思われる」と述べる。

次いで、カウンターナラティヴの継承と変容をソローとカーソンにおいて論じている。ソローの『ウォールデン』と「市民の不服従」は発表当時奴隷制存廃で揺れる時代への明確なカウンターナラティヴであったが、1960年代のベトナム戦争と市民権運動を経て、地球規模の汚染が問題となる1970年代にそれらはカウンターナラティヴの要素を含みつつ、土地に対する現状保守に利用されマスターナラティヴ化する傾向もあったことを指摘する。それに対してカーソンの『沈黙の春』は米ソの冷戦を背景に無垢なる<アメリカの自然>が旧世界の歴史に綿々と続く<毒の系譜>に連なるものであることを、合成化学農薬の汚染において明らかにしたと論じる。「こうしてカーソンは、ソローが決別したロマン派と旧世界をアメリカに再導入した。アメリカこそいまや旧世界なのであった」と続ける。そして「カーソンの説得のレトリックは、ソローのカウンターナラティヴとナショナルナラティヴの接合からなっている」と結論づける。

「まえがき」の後半は、「広島・ヒロシマという土地の場所性」の表題のもと掲載論文一つ一つについての優れた要約と紹介となっている。掲載されている20の論文はそれぞれに力作であり、新しい知見を展開している。論文すべてについて言及できないのが残念であるが、伊藤氏による紹介が簡潔であり、読者にとって参考となる。

掲載論文が扱う作家とテキストは多様であり、それを「カウンターナラティヴ」というテーマに集約した監修者と編集者の方々の努力が察せられる。執筆者が扱う作家あるいは題目を挙げるとすれば次のようになる。「Ⅰ カウンターナラティヴとアメリカン・ルネサンス」では、ホーソーン（城戸光世）、メルヴィル（大島由紀子）、チャイルド（辻祥子）、ポー（伊藤詔子）、トウェイン（辻和彦）、ミュア（真野剛）、エコクリティシズム（スコット・H・スロヴィック）が取り上げられ、「Ⅱ エスニシティとジェンダーにみるカウンターナラティヴ」では、フィッツジェラルド（杉野健太郎）、フォークナー（大地真介）、スタインベック（中島美智子）、日系のマスモト（岸野英美）、チカーノのアナーヤ（水野敦子）、先住民作家のアドリック（横田由理）、モリスン（早瀬博範）について論じられ、「Ⅲ カウンターナラティヴの新たな展開」では、日系のオオツカ（マイケル・ゴーマン）、アメリカ音楽（福屋利信）、スナイダー（塩田弘）、先住民作家のアレクシー（松永京子）、戦争映画（的場いづみ）、そしてユダヤ系のフェダマンとアビッシュ（新田玲子）が取り上げられている。読者は関心の赴くままに読み進めばよい構成となっている。

書評の後半は、筆者の個人的関心を引いた2つの論文を簡単に紹介したい。スコット・H・スロヴィック氏の「エコクリティシズムの希望——環境批評と人文諸科学の未来にむけて」（中島美智子訳）は、文学批評としてのエコクリティシズムとは何かを考える上で興味深いと思われる。

論考は、エコクリティシズムに何ができるのかといったナイーヴな問いかけへの真摯な返答として読むことができる。氏は「エコクリティシズムは基本的に希望に満ちた学問的・教育的な営為である」とし、環境批評家たちは生態学的な危機的状况を改善するという「願望を抱いて、環境文学や環境芸術を読んで分析し、あらゆるレベルの学生に授業をし、地元および遠方の団体や政府の役人に陳情し、個人的な生活様式を検討し調整するといった仕事をしている」と述べる。一方でこの学問分野は、環境主義が「個人の解放や社会改革のポリティックスになることは困難である」とする批評家の批判に晒されていることにも言及し、それでもなお「過去三〇年の間（特に一九九〇年代初頭から）に世界中でエコクリティシズムを急成長させたのは使命感であったと主張したい」とし、エコクリティシズムの力とは「希望的なサイン」であると言う。

スロヴィック氏はこの「有望な学問分野」がもつ「希望的なサイン」を4つ挙げている。一つ目は、エコクリティシズムが私たちに言葉や言語の重要性を教えるからであるとする。「言語は本質的に我々の生活のすべてのものについてどのように考えるかということにつながっており」、エコクリティシズムは経済学や科学の言説ではない、場所への「愛」といった環境的な価値を表す言語を再創造する力を与えることができる。二つ目はこの批評が、インターディシプリナリーな「多面的な分野」であり、「柔軟で、寛容で、励みになる学問分野であることを暗示している」とする。三つ目はこの分野がアメリカの学术界内で急速に拡大していること、そして日本、韓国、イギリスにもエコクリティシズムの研究が広がっていることをあげる。中国やインドを含め「最近では、アルゼンチンからフィンランドまで世界中の他の多くの国々で、環境批評家のコミュニティが急速に発達している」のである。四つ目は、新しい世代への期待である。「私はエコクリティシズムが手を差し伸べ、新しい世代をこの分野に引き入れようとする様に常に激励され鼓舞されている」と述べる。このような4つの「希望のサイン」を考えると、「文学研究の環境論的手法は、一枚岩的なものというよりは矛盾した一連の実践といった方がよく理解できる」というローレンス・ビュエルの引用される言葉がこの分野の特徴をよく表している。エコクリティシズムは、厳密な文学理論というより環境的視点を持つ一つの批評的「実践」に近いと思われる。

最後にマイケル・ゴーマン氏の「トパーズからグアタナモ湾へ——オオツカの『天皇が神だったころ』と強制収容所」（松永京子訳）を挙げておきたい。氏は、2002年に出版されたジュリー・オオツカ作品を当時のアメリカ政府による〈対テロ戦略〉のコンテキストにおいて読むことで、人権侵害についての「倫理的・道徳的疑問を呈することを読者に促す」テキストであると捉える。作品は、第二次世界大戦中カリフォルニア州バークレーに住んでいた日系家族がユタ州トパーズのトパーズ戦争移住センターに強制収容された体験を描いたものである。家族に名前が与えられていないのは、このテキストが日系の「集会的トラウマの文化的記憶」の機能を持っていることの要因の一つであるとする。作品における「沈黙」や「視覚的・聴覚的不在を示す概念である〈間 (ma)〉」の修辞法を読み解くことで、家族が体験する喪失感やトラウマを考察する。作品は、強制立ち退きを要請するフランクリン・ルーズベルトの大統領行政命令第九〇六六号の影響によって、「日系アメリカ人一家が被った人権侵害を詳述」していると捉える。

ゴーマン氏はさらにこの作品が出版された2002年はグアタナモ湾の収容所に敵性戦闘員が受け入れ始められた時期であることに注目し、作品の「即時性」を指摘する。日系アメリカ人に対する人権侵害を描くこの作品は、当時の〈対テロ戦略〉による人権侵害をも照射しているとする。

『天皇が神だったころ』は「ブッシュ政権の対テロ戦争の役割を記念碑的歴史として捏造することに対して、カウンターナラティブの役割を果たしている」のではないかと捉え、「日系強制収容所の歴史はすなわち、現在の問題なのだ」と結ぶ。

以上、伊藤氏による「まえがき」とスロヴィック氏とゴーマン氏の論考を紹介することで本書の魅力の一端を伝えることができたのではないと思う。掲載されている優れた論考すべてに言及することができないことは残念であるが、伊藤氏の四十数年に及ぶ研究と教育から育まれた、氏と縁のある人々による研究がこのような重厚な論文集として結実したのは確かなことである。

加藤幹郎監修、杉野健太郎編著

『交錯する映画 アニメ・映画・文学』

(ミネルヴァ書房、2013年3月、xii + 324頁 + 19、本体4,200円 + 税)

山下興作

映画館への来場者数が減少しているといわれて久しいが、衛星放送やDVD、PCやケータイでの視聴を含めれば、映画がいまなお多くの人間を魅了し続ける重要な文化資産の地位を占めていることは間違いない。しかし、リュミエール兄弟が世界最初の実写映画とされる『工場の出口』を公開したのが1895年であったことを考えると、その歴史は意外に若いともいえるだろう。そのためか、国の歴史の半分が映画の歴史と重なっているアメリカ合衆国を例外として、映画という表現媒体についての精密な議論と考察は長らく手つかずのままであった。こうした認識にたちながら、新たに映画が人類の歴史においていかに重要な機能を果たし、人間と密接に関わるものであるかを論証することを目的として加藤幹郎を中心に創刊されたのが『映画学叢書』である。全10巻の予定のうち、既刊は4巻で、本書はそのうちのひとつである。全体は3部から構成され、それぞれに2～4の章が配されている。

第I部「映画とアニメ」にはふたつの章が割かれている。板倉史明「日本アニメーションにおけるスタイルと演出技法―草創期から第二次世界大戦まで」(第1章)は、日本の戦前・戦中のアニメーション作品に映画学の手法に基づいた分析研究を施す。これまでアニメ分析や評論といえば、作品がどのようなメッセージやイデオロギーを伝えているかを問う表象分析が多かった。しかし、板倉は作家たちがいかなるモンタージュやフレーム内の演出を実践していたかに論考の焦点を絞り、日本のアニメーション黎明期から戦前戦中期にかけての特徴的なスタイル傾向を検証しつつ、『くもとちゅうりっぷ』(正岡憲三監督、1943)でその技術的技法的な集大成ともいえる運動の滑らかさと奥行き表現を獲得していく過程を描き出す。

川勝麻里「宮崎駿と手塚治虫―＜漫画の神様＞を超えた漫画映画」(第2章)は、宮崎駿の『天空の城ラピュタ』を取り上げ、アニメーションと漫画の関係について考える。若い頃に手塚の漫画を愛読し、その影響を受けた漫画を描き続けてきた宮崎は、東映動画のアニメーターとな

り手塚の影響から卒業できたと述べている。しかしながら、スタジオジブリ創設後の『天空の城ラピュタ』においても、手塚漫画の構図やキャラクターの影響が色濃く見られることを、スーパーフラット（漫画表現的な平面性）という概念を軸に明らかにしていく。と同時に、物語の後半にみられる手塚離れの要素を指摘し、そこになんとか手塚の呪縛から逃れようと苦悶する宮崎の姿を読み取る。日本のアニメーションの歴史は手塚治虫の漫画をどのように乗り越えていくかの歴史であるとはよくいわれるが、宮崎と手塚の複雑な関係を通してその様を読み解いているのが本章の読みどころであろう。

第3章から第5章は「第Ⅱ部 映画と文学」を構成する。山本佳樹「ハンス・カストルブの映画見物—トーマス・マンと〈映画論争〉」（第3章）は、トーマス・マンの小説『魔の山』の中で主人公が映画館に出かける場面から論を起し、猛烈な勢いで躍進してきた映画の影響やその芸術性をめぐる激しい議論にマンが巻き込まれていく様を跡付け、当時のドイツ語圏における映画と文学の〈交錯〉の一側面を鮮やかに描き出す。

第4章と第5章は、文学から映画へのアダプテーションの問題を扱う。アダプテーションとは、あるメディアから別のメディアへの移し替えのことであるが、ここでは小説から映画への移し替えが扱われる。この場合、凡庸な小説が優れた映画化により名作となる場合もあれば、名作が駄作となる場合もある。特に後者の場合、勢い原作の世界をいかに忠実に再現しているのみが判断基準となることが多い。杉野健太郎「アダプテーションをめぐるポリティクス—『華麗なるギャツビー』の物語学」（第4章）は、この問題を比較物語的な視点から新たに問い直そうという意欲あふれる論考である。つまり、F・S・フィッツジェラルドの小説『グレート・ギャツビー』（1925）とその映画化『華麗なるギャツビー』（ジャック・クレイトン監督、フランク・フォード・ Coppola監督）を取り上げ、映画と小説のメディア特性を視野に入れながら、両者の語りと物語内容を比較分析した著者は、小説『グレート・ギャツビー』に比して、映画『華麗なるギャツビー』の語りはジェンダー・バイアスがなく民主主義的であるがゆえに女を脱神秘化し、その結果〈アメリカンドリーム〉の終焉がより強く表わされていると結論付ける。

山口和彦「ディアスポラ映画のジレンマ—『その名にちなんで』における成長物語、家族物語、アイデンティティ政治」（第5章）は、カルカッタ出身の両親を持つインド系アメリカ人作家ジュンバ・ラヒリによる半自伝的小説（2003）をインド系アメリカ人女性監督ミーラー・ナーイルが映画化した同名作品を考究する。そこでは広い意味でのディアスポラ芸術家としてのナーイルとラヒリの共鳴的關係が「民族的自伝」という概念を媒介に、原作と映画の相互干渉と相互補完的な関係を前提に、両者が民族の集合的アイデンティティの構築をめぐる成長物語としての、さらには家族物語としての解釈を許しながらも、同時にそのような解釈をテキスト自身が解体していることが示される。さらには、植民地主義・帝国主義に参照枠を広げ、一見政治性が薄いように見える同作が孕む無意識化された政治性を指摘し、脱アイデンティティの概念を称揚することの容易さと、それを実践することの困難さの間で揺れるディアスポラ映画のジレンマを明らかにする。

評者としてはこの2つの章が最も興味を惹かれ、刺激を受けたところでもあるが、欲を言えば、最近よく見られる「ノヴェライゼーション」（映画・アニメの小説化）が映画研究者の目にどう映っているのかを扱う論考が欲しかった。

「第Ⅲ部 メディア、ジャンルと映画」では、視角メディア、メディア・ミックスならびにジャンルと映画にまつわる問題が扱われる。塚田幸光「ゲルニカ×アメリカヘミングウェイ、イヴェンス、クロスメディア・スペイン」(第6章)は、スペイン内戦とヘミングウェイ、そして複数のメディアとの関わりを探る。パブロ・ピカソの『ゲルニカ』(1937)がナチスの無差別爆撃を告発する作品であることは周知であるが、同年にヨリス・イヴェンヌが制作したドキュメンタリー映画『スペインの大地』はイタリア軍の爆撃をフィルムに収め、スペイン人民の悲劇とファシズムの暴虐を暴き、批評家トマス・ウォーから「シネマティック・ゲルニカ」と呼ばれた。本章では、監督イヴェンヌと共同制作者／作家ヘミングウェイとの関係を探り、スペイン内戦とメディアとの関係に焦点をあて、小説とジャーナル、映画というメディアの交差から見える「スペイン」、あるいはその政治性を考察する。

川本徹「文学と映画のアメリカ眼球譚－エマソン、『西部開拓史』、『2001年宇宙の旅』」(第7章)は、アメリカ文学と映画における自然という問題を、エマソンの1836年の眼球譚を、1960年代の西部劇とSF映画の文脈に結びつけて論じる。1960年代に公開された『西部開拓史』と『2001年宇宙の旅』はジャンルこそ異なるが、ともにその終盤においてエマソンの眼球譚を想起させる大規模な空撮シーンを用意し、その一部にアメリカ西部のシンボルでもあるモニュメント・バレーを登場させる点で一致している。ただし、著者によれば、『西部開拓史』が人間と自然を明確に分け、前者が後者を支配するのに対し、後者では人間と自然の境界線が消滅し、両者が相互浸透する関係を描く。

小野智恵「ポスト・ノワールに迷い込む古典的ハリウッド映画－『ロング・グッドバイ』における失われた連続性」(第8章)は、ロバート・アルトマン監督作『ロング・グッドバイ』(1973)がいわゆる古典的ハリウッド映画というスタイルからいかに独創的な決別をしているかを扱う。同作が従来の〈フィルム・ノワール〉への参照に充ちたものであることは認めるが、旧来型の私立探偵を主人公とした作品はもとより、同時代的な新しさを備えたポスト・ノワール作品ともその存在意義を異にした作品であることを、「変奏されて繰り返される主題曲のメロディ」「汚れたガラス越しの黒塗りの顔」「信用できないズームイン」「因果性のない暴力」を手掛かりに明らかにしていく。

御園生涼子「少女・謎・マシンガン－〈角川映画〉の再評価」(第9章)は、1970年代に現れ、80年代前半のピークの後、90年代に終焉を迎える〈角川映画〉の足跡を考察したものである。収益を重視する商法ばかりが目を集め、批判的に語られることの多い〈角川映画〉だが、評価すべき点も少なくない。特に、1980年代に少女スターを中心とした「アイドル映画」の中で新しい才能を次々と登用し、メジャーデビューへの道を開いた功績は大きい。本章はそうした、〈角川映画〉のたどった道筋を追いながら、時代の寵児でもあり、また自らも時代に翻弄された角川春樹と〈角川映画〉が、日本映画史においてどのような意味をもちうるのか、改めて問い直そうというものである。

ざっと内容を紹介するだけでもはや紙幅が尽きてしまったが、「映画学」という領域が、着実に根付き、成果を出し続けていることを、本書を読み進めながら痛感した。今後、文学をはじめ他のメディア研究と手を携え、あるいは互いに刺激し合いながら、ともに発展していきたいと切に願う次第である。

編 集 後 記

『中・四国アメリカ文学研究』（第50号）をお届けします。今回は4名の論文投稿希望者があり、編集委員会として最終的に受理した論文は2篇でした。厳正な審査の結果、採用なしとなりました。今号の執筆者の氏名と所属機関は以下のとおりです。

城 戸 光 世 （広島大学）
辻 祥 子 （松山大学）
横 田 由 理 （大東文化大学）
Michael Gorman （広島市立大学）
松 永 京 子 （神戸市外国語大学）
今 石 正 人 （広島修道大学）
上 西 哲 雄 （東京工業大学）
吉 田 美 津 （松山大学）
山 下 興 作 （高知大学）

今年度の編集委員は次のとおりです。

辻 祥 子 （松山大学）
的 場 いづみ （広島大学）
堤 千 佳 （梅光女学院大学）
山 下 興 作 （高知大学）

次号は2015年6月に発行の予定です。会員の皆さまからの多数のご投稿をお願いします。投稿希望のご連絡は、e-mailでも受け付けます。編集責任者（yamasita@kochi-u.ac.jp）または事務局までご連絡ください。また、過去一年間に会員が関わって編集された研究書等のなかで、優れたものの「書評」を掲載しますので、事務局と編集責任者までご献本をお願いします。

44号以降の会誌の内容はすべてPDF化し、ホーム・ページで公開しています。43号までの会誌については、目次のみ公開しています。ご活用ください。

会員が所属されている機関等で、会誌に掲載された論文等を公開される場合（個人のホーム・ページを含む）は、必ずPDF化した会誌あるいは抜き刷りの紙面を用い、当該論文等が掲載された会誌の号数を明示してください。公開に際して、事務局へのご連絡は不要です。なお、著作権は、執筆者本人と中・四国アメリカ文学会に帰属するものとします。

投稿規定

1. 資格：過去1年以上、本学会会員であること。
2. 内容：アメリカ文学全般に関する、未公開の研究論文。
3. 制限：投稿原稿は、完成原稿とし、一人につき1篇とする。
4. 体裁：
 - 1) 執筆に際してはワープロ・ソフトを使用し、和文・英文とも、仕上がりページの書式（A4判で、1ページ43字×38行、文字のポイントは11）に設定すること。
 - 2) 和文の場合は、注および引用文献を含む9枚以内の本体（ただし、9枚目は5行分の余白を残すこと）に、英文のシノプシス1枚を付すこと。
 - 3) 英文の場合は、注および引用文献を含む11枚以内。英文のシノプシスは不要。
 - 4) 和文の場合は、外国語の固有名詞（人名・地名）および作品名は日本語で示し、初出の箇所のでその原綴りを丸括弧内に表記すること。ただし、よく知られている場合は省略してよい。
 - 5) 本文中の引用の仕方、注および引用文献の表記の仕方、英文原稿（英文シノプシスを含む）のスタイル等に関しては、*MLA Handbook for Writers of Research Papers*または『MLA英語論文の手引き』（北星堂）の最新版に従うこと（Works Cited方式とする）。
 - 6) 投稿論文には、氏名、謝辞、口頭発表の仔細などは記載せず、表題のみを記すこと。
 - 7) 投稿論文には、通し番号を付すこと。
5. 提出：
 - 1) 打ち出し原稿2部を編集責任者の許へ送付すると共に、MSワードで作成した添付ファイルをメールで送ること。
 - 2) 中・四国アメリカ文学会のホームページにある「投稿チェックシート」をダウンロードし、必要事項を書き込み、打ち出し原稿と共に編集責任者の許へ送付すること。
6. 締切：
 - 1) 投稿希望の場合は、毎年10月末日までに、(1)論文の表題、(2)和文・英文の別、(3)予定枚数、(4)氏名、(5)所属、(6)住所・電話番号・メールアドレスを、葉書あるいはメールで編集責任者または事務局へ連絡すること。
 - 2) 投稿の締切は、毎年1月10日とする。期限厳守。
7. 宛先：〒780-8522 高知市曙町2-5-1 高知大学人文学部 山下興作
8. その他：投稿原稿は返却しない。採用決定後、修正原稿を添付ファイルとして編集責任者へメールで送ること。なお、執筆者は初校終了時に、分担金として1篇につき2万円を、郵便振替口座（01380-0-22492（最後の番号は右詰））に振り込むこととする。

「シンポジウム報告」および「書評」の執筆要領は、ホーム・ページをご覧ください。

ISSN 0388-0176

中・四国アメリカ文学研究 第50号

2014年6月1日 発行

編集兼発行者 中・四国アメリカ文学会
発行責任者 新田 玲子
編集責任者 山下 興作
事務局 広島大学文学部 大地研究室
〒739-8522 東広島市鏡山1-2-3
Tel : 082-424-6685

e-mail : shohchi@msn.com

URL : <http://www.chushi-als.org>

印 刷 (有)近森謄写堂
〒780-0870 高知市本町5-5-18
Tel : 088-875-2181 Fax : 088-875-2215

Chu-Shikoku Studies in American Literature, No. 50

Edited, published, and distributed by

The Chu-Shikoku American Literature Society

Executive Office : Faculty of Literature (c/o Assoc. Prof. Ohchi)

Hiroshima University, 1-2-3, Kagamiyama,

Higashi-Hiroshima, Hiroshima 739-8522 Japan

Tel : 082-424-6685

e-mail : shohchi@msn.com

URL : <http://www.chushi-als.org>